

9 貝類

今回の見直しによって新たにレッドリストに掲載された各貝類について、種ごとに形態的な特徴や分布、県内の状況等を解説した。記述の項目、内容等は以下の凡例のとおりとした。

【掲載種の解説（貝類）に関する凡例】

【分類群名等】

対象種の本調査における分類群名、生息環境区分（陸産・淡水産・内湾産）、分類上の位置を示す目名、科名等を各頁左上に記述した。目・科の範囲、名称、配列は、原則として以下の文献に準拠した。

- ・陸産貝類・淡水産貝類
「日本産野生生物目録－本邦産野生動植物の種の現状－（無脊椎動物編Ⅲ）」（財団法人自然環境研究センター, 1998）
- ・内湾産貝類（海産貝類）
「Catalogue and bibliography of the marine shell-bearing mollusca of Japan」(S.Higo et al., 1999)
「日本近海産貝類図鑑」(東海大学出版会, 2000)
- ・内湾産貝類（干潟の貝類）
「干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック」(日本ベントス学会, 2012)

【評価区分】

対象種の愛知県における評価区分を各頁右上に記述した。参考として「貝類 環境省第4次レッドリスト」(環境省, 2012)の全国での評価区分も各頁右上に記述した。また、各評価区分に対応する英文略号も同じ場所に記述した。

【和名・学名】

対象種の和名及び学名を各頁上の枠内に記述した。和名及び学名は、原則として【分類群名等】の項に示した文献に準拠した。一部の異名は和名の後の（ ）内に記述した。

【選定理由】

対象種を愛知県版レッドリスト掲載種として選定した理由について記述した。

【形態】

対象種の形態の概要を記述した。

【分布の概要】

対象種の分布状況の概要を記述した。

【生息地の環境／生態的特性】

対象種の生息地の環境条件及び生態的特性について記述した。

【現在の生息状況／減少の要因】

対象種の愛知県における現在の生息状況、減少の要因等について記述した。

【保全上の留意点】

対象種を保全する上で留意すべき主な事項を記述した。

【特記事項】

以上の項目で記述できなかった事項を記述した。

【引用文献】

記述中に引用した文献を、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に示した。

【関連文献】

対象種に関連する文献の内、代表的なものを、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

アサヒキヌタレガイ *Acharax japonica* (Dunker)

【選定理由】

個体群・個体数の減少、生息条件の悪化が選定理由としてあげられる。本種はキヌタレガイ *Petrasma pusilla* (愛知県ランク NT) の近似種であるが、さらに外洋水の影響の強い潮下帯のアマモ場周辺の砂泥底に生息することが多い。キヌタレガイが生息する三河湾湾口部の砂泥底からも死殻すら採集されなかった(木村, 1996; 2000)。しかし、浜名湖、三重県側の伊勢湾口部、英虞湾では生貝が継続的に確認されており、近年三河湾湾口部で操業する底引き網の漁屑中より少数の新鮮な死殻が採集されたので、愛知県内にも生息していると判断された。今までのドレッジ調査、底引き網漁業の漁屑調査でも生貝は採集されていないので、危機的生息状況であると判断された。

【形態】

殻長 20 mm。殻は円筒形で厚い殻皮におおわれ非常に薄く、石灰分が少なく軽く脆い。キヌタレガイと近似するが、やや殻は厚く、殻の色彩は濃く、淡黄褐色の放射肋が明瞭で数が多い。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県内では、近年三河湾湾口部で新鮮な死殻が採集されたにすぎない。本種の死殻は石灰分が少なく比較的早期に分解するので、おそらく付近に生息域が存在すると判断された。

【世界および国内の分布】

日本以外では中国大陸に生息記録がある。日本では北海道から九州の内湾から湾口部の潮間帯から水深 20 m 程度の砂泥底に生息する。キヌタレガイより外洋水の影響の強い海域を生息環境とする場合が多い。現在干潟で生きた個体が確認されることは非常に少ない。浜名湖や瀬戸内海では潮間帯のアマモ場で生きた個体が確認されている。

【生息地の環境／生態的特性】

内湾から湾口部の潮間帯から水深 20 m 程度のアマモ場周辺の砂泥底に生息する。鰓には硫化水素を用いて有機物を合成する化学合成細菌が共生している。その他の生態的な特性についてはほとんど知られていない。

【現在の生息状況／減少の要因】

生息状況は、【選定理由】の項参照。本種は潮通しの良い良好なアマモ場周辺に生息するので、アマモ場の消失は無論、干潟の埋め立て、無酸素水塊の発生、水質汚濁の影響を受けやすい。

【保全上の留意点】

現在本種が生息確認される海域の環境を維持することが重要である。干潟から潮下帯に連続する生息環境を保全する事が重要である。

【引用文献】

- 木村昭一, 2012. アサヒキヌタレガイ, p.106. in: 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野市.
木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第 35 報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18-20.

【関連文献】

- 秀島佑典・木村妙子・木村昭一・佐藤達也, 2014. 生浦湾における貝類群集と底質環境の季節変動. *Venus*, 72(1-4): 139.
鈴木孝男・木村昭一・木村妙子・森 敬介・多留聖典, 2013. 干潟生物調査ガイドブック 全国版(南西諸島を除く), 269pp. 日本国際湿地保全連合, 東京.

(執筆者 木村昭一)

コツツガイ *Eufistulana grandis* (Deshayes)

【選定理由】

個体群・個体数の減少、生息条件の悪化が選定理由としてあげられる。本県では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種は現在伊勢湾及び三河湾湾口部で稀に棲管が打ち上げられたり、潮下帯から比較的新しい棲管や半片死殻が採集されるが生息が確認できない(木村, 1996; 2000)。近年、三重大学生物資源学部実習船勢水丸のドレッジ調査で伊勢湾湾口部から棲管と共に中の貝殻まで保存された新鮮な死殻が採集され、現在も生息していると判断された。危機的な生息状況である。

【形態】

殻長 40 mm で殻は白色で長方形。全長 100 mm を越える細長い石灰質の棲管を分泌してその中に生息する。棲管は先端部分を残して、底質中にはほぼ垂直に埋もれる。棲管の外側表面には砂粒やサンゴの破片等周囲の底質を付着させている。

【分布の概要】

【県内の分布】

伊勢湾及び三河湾湾口部から渥美外海にかけての潮下帯に生息していると考えられる。

【世界および国内の分布】

日本の他、インド・太平洋に広く分布する。日本では房総半島以南から南西諸島の内湾から湾口部にかけての低潮線から潮下帯の砂泥底に分布する。沖縄島では羽地内海の干潟で生きた貝が確認されているが、沖縄島周辺以外の干潟域で本種の生息が確認されている場所はほとんど無い(木村・久保, 2012)。また、沖縄島では潮下帯に健全な個体群が確認されているが、本州から九州では潮下帯においても棲管がかろうじて採集されることはあるが、近年生きた個体が採集された記録は無い(木村・久保, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

内湾の潮間帯から潮下帯の砂泥底に石灰質の長い棲管を分泌してその中に生息する。その他の生態的特性については不明。

【現在の生息状況／減少の要因】

生息状況は、【選定理由】の項参照。上述したように県内の潮下帯は環境が悪化しているため、本種の生息場所、生息数とも減少している。

【保全上の留意点】

現在本種が生息確認される海域の環境を維持することが重要である。内湾から外洋域、干潟から潮下帯に連続する生息環境を保全する事が重要である。

【引用文献】

- 木村昭一・久保弘文, 2012. コツツガイ, p.153. in: 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野市.
 木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第 35 報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
 木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, 26: 18-20.

【関連文献】

- 木村昭一, 1995. 日間賀島南部海岸の潮間帯付近の軟体動物相. 研究彙報(第 34 報): 16-27. 全国高等学校水産教育研究会.

(執筆者 木村昭一)

オウギウロコガイ *Galeommella utinomii* Habe

【選定理由】

愛知県内では近年、三河湾と知多湾のそれぞれ1箇所計3個体の生貝が確認されたのみである。全国的にも希少な種であり、愛知県内での生息記録は、きわめて貴重である。最近、愛知県内における生息が知られたばかりの種であり、減少傾向は把握できない。しかし、県内では本種が生息する良好な内湾環境や潮間帯の環境が高度経済成長期に激減したため、本種の生息環境はきわめて限られていると推測できる。したがって、この限られた環境が維持されなければ、本種は愛知県内から絶滅する可能性がきわめて高いと考えられる。

【形態】

殻長5~7mm程度の小型種である。殻は白色半透明できわめて薄く、放射肋が明瞭である。生時は、軟体(外套)が殻を包み込み、先端部のみが赤い長い突起が伸びる。本種の活動時は、腹足類(巻貝類)のように足で匍匐するので、一見すると、ミノウミウシ類の様である。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県内では、前島(三河湾)(早瀬・他、投稿中)と河和(知多湾)(早瀬、投稿準備中)のみで確認されている。潮間帯の転石下より確認されている。

【世界および国内の分布】

東京湾~九州に分布し、日本固有種の可能性が高いとされる(木村・福田, 2012)。

【生息地の環境/生態的特性】

内湾環境に生息する。潮間帯の埋もれた転石下に付着して生息する。周辺が還元環境となっている場所に生息する。淡水が滲出する特殊な埋没転石下の微環境のみに生息する。ツヤマメアゲマキとは同所分布する。

【現在の生息状況/減少の要因】

本種の生息確認地においても、多数の個体が確認されることはない。きわめて特殊なマイクロハビタット(微生息環境)のみに生息すると考えられる。したがって、本種の生息には、きわめて多様性に富んだ良好な潮間帯の環境が必要である。内湾環境の開発が進んだ愛知県内においては、本種の生息環境は著しく狭められ、限られた場所のみとなっている可能性が高い。

【保全上の留意点】

本種の生息環境の維持には、内湾環境の保全と共に、潮間帯の転石環境や藻場、アマモ場環境などの様々なマイクロハビタット(微生息環境)をも保全・維持することがきわめて重要である。

【特記事項】

本種をはじめ、転石下の特殊生息環境に棲む種が確認される場所には、他の希少な種も多種共存しており、きわめて多様性の高いホットスポットとなっている。単に特定の種を評価対象種に位置付けるのみではなく、これらの種の生息する環境と貝類相を合わせ「特殊環境棲貝類保護地」に指定するなど、今後は、環境を含む包括的な保護を考える必要がある。

【引用文献】

早瀬善正・大貫貴清・吉川 尚・松永育之・社家間太郎, 投稿中(2014, 受理). 前島(三河湾)の転石地潮間帯の貝類相 - 特徴的な16種の記録, ちりぼたん.
木村昭一・福田 宏, 2012. オウギウロコガイ, p.159. in: 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野市.

【関連文献】

多々良有紀・福田 宏, 2009. 東京湾小櫃川河口産オウギウロコガイ(二枚貝綱: マルスダレガイ目: ウロコガイ科), *Molluscan Diversity*, 1(1): 12-17.

(執筆者 早瀬善正)

マゴコロガイ *Peregrinamor oshimai* Shoji

【選定理由】

個体群・個体数の減少、生息条件の悪化・特殊生息環境が選定理由としてあげられる。本種は河口域の干潟から潮下帯の砂泥底に生息するアナジャコ類の頭胸部腹面に足糸で付着する。本県では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。このような状況から本種も明らかに生息場所、生息数とも激減していると考えられる。本種は1980年代に三重県側の伊勢湾からは生息記録がある(木村・山本, 1990)が、愛知県からは分布の概要に記したとおり名古屋市沖(伊勢湾)から1個体採集されたに過ぎない(木村, 2010; 2012)。

【形態】

殻長約10mm。貝殻は両殻を合わせて背面から見るとハート型で、和名はその外形および付着部位にちなむ(庄司, 1938)。

【分布の概要】

【県内の分布】

2008年のドレッジ調査で名古屋港沖の水深約6mの泥底に生息していたアナジャコ類の頭胸部腹面に付着した1個体のみが採集された。この名古屋港沖合の採集記録が県下からの初めての記録である。藤前干潟にもアナジャコ類は多産するが、本種が採集された記録はない(木村, 2010)。その後も愛知県下では生息記録はない。

【世界及び国内の分布】

日本でのみ記録されている。模式産地は東京湾(庄司, 1938)で、伊勢湾、瀬戸内海、九州の内湾域に分布する。東京湾からは原記載以来採集記録はなく、愛知県名古屋市が現在知られている分布の東限、北限である(木村, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

【選定理由】の項参照。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋め立てをこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

- 木村昭一・山本妙子, 1990. マゴコロガイを伊勢湾で採集. ちりぼたん 21(1・2): 12-13. 日本貝類学会.
木村昭一, 2010. 貝類, pp.185-222. in: 名古屋市動植物実態調査検討会(監修), レッドデータブックなごや2010-2004年版補遺-, 316pp. 名古屋市環境局環境都市推進部生物多様性企画室, 名古屋.
木村昭一, 2012. マゴコロガイ, p.162. in: 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野市.
庄司幸八, 1938. 珍しい共棲二枚貝マゴコロ貝. Venus 8(3-4): 119-127. 日本貝類学会.

【関連文献】

- 鈴木孝男・木村昭一・木村妙子・森 敬介・多留聖典, 2013. 干潟生物調査ガイドブック 全国版(南西諸島を除く), 269pp. 日本国際湿地保全連合, 東京.

(執筆者 木村昭一)

コオキナガイ *Laternula (Laternula) impura* (H.A. Pilsbry)

【選定理由】

2002年版愛知県レッドデータブックではコオキナガイとして未記載種のオキナガイ属の1種を誤同定して掲載されたが(愛知県, 2002)、2009年版愛知県レッドデータブックではコオキナガイは分布域から考えて生息していた可能性は高いが、愛知県内から確かな生息記録や標本が確認できず、コオキナガイはリストから削除され、オキナガイ属の1種がリストに掲載された(愛知県環境調査センター, 2009)。2011年に実施した標本調査の結果、愛知県田原市汐川干潟で1965年に河辺訓受氏(名古屋貝類談話会)によって採集されたコオキナガイと確実に同定される1個体の標本が見いだされた。これにより愛知県にも生息していたことが明らかになった(木村, 2012)。

個体群・個体数の減少、生息条件の悪化が選定理由としてあげられる。本県でも干潟という生息環境自体が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため、本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる。現在本種は死殻も全く採集されず、絶滅した可能性も高い。

【形態】

殻長約4cmで、殻は長楕円形で膨らみはやや強い。殻は白色で非常に薄く脆い。ソトオリガイと近似するが、殻の丸みが強く、後端が細まり尖る点で区別できる。殻表には微細な顆粒状突起があり、その形態でも他種とは区別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように、現在では生息は確認されず、死殻でさえ全く採集されない。本県の個体群は絶滅した可能性が高い。

【世界及び国内の分布】

房総半島～南西諸島、中国大陸に分布する。三浦半島(葉山しおさい博物館, 2001)では絶滅が報告され、東京湾(千葉県, 2000)でも絶滅した可能性が非常に高い。南西諸島ではかつては健全な個体群が確認されていたが、護岸工事や埋立などで個体群ごと消失した例も多く、現在、生息地はほとんど残されていない(沖縄県, 2005)。三重県英虞湾奥部の狭い範囲で少数の生きた個体が採集され、現在の分布東限と考えられる。瀬戸内海西部、九州西岸でも生息が確認されているが、生息地、個体数とも非常に少ない(木村, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

唯一標本の採集された汐川干潟で毎年モニタリングが行われているが、死殻も見られず生息が確認できない。上述したような干潟の環境は破壊されているため、本種の生息場所、生息数とも減少したと考えられる。

【保全上の留意点】

内湾の潮間帯の環境を保全する。干潟の埋め立てをこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

- 愛知県, 2002. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち2002-動物編-, 596pp. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.
- 愛知県環境調査センター(編), 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち2009-動物編-, 651pp. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.
- 葉山しおさい博物館, 2001. 相模湾レッドデータ 貝類, 104pp.
- 木村昭一, 2012. コオキナガイ, p.168. in: 日本ペントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑-海岸ペントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野市.
- 沖縄県, 2005. 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物(動物編)-レッドデータおきなわ-, 561pp.
- 千葉県, 2000. 千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック動物編, 438pp.

【関連文献】

- 鈴木孝男・木村昭一・木村妙子・森 敬介・多留聖典, 2013. 干潟生物調査ガイドブック 全国版(南西諸島を除く), 269pp. 日本国際湿地保全連合, 東京.

(執筆者 木村昭一)

ムラクモキジビキガイ *Japanacteon nipponensis* (Yamakawa)**【選定理由】**

愛知県内で本種の生息(生貝)を示した記録は最近の1報告のみである。これまでに愛知県内で生貝か死殻か不明の分布記録はいくつか見られるものの、明確な生貝の記録はなく、近年でも生貝の確認がきわめて稀である状況より愛知県内では稀産であるか減少傾向を示していると考えられる。全国的にも減少傾向が認められる種であり、絶滅の危険性の高い種と考えられる。

【形態】

殻高 9.1mm、殻径 4.8mm 程度の丸みを帯びた紡錘形の小型種である。殻はきわめて薄く、体層には細い黒色の横縞模様が明瞭であり、縫合付近には黒色の雲状斑の模様が特徴的である。軟体は黒色で頭部には頭楯が見られる。

【分布の概要】**【県内の分布】**

生貝の記録は近年、西尾市東幡豆町(三河湾)の干潟環境より1個体のみ知られる(早瀬・他, 2011)。これ以前にも三河湾より分布記録は見られたが(中島, 1996)、明確な生貝の記録ではなく、過去のレッドデータブックでは評価対象種に扱わなかった。

【世界および国内の分布】

朝鮮半島、日本国内では、陸奥湾～九州に分布するとされる(福田・木村, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

愛知県内での生貝の確認環境は、三河湾の内湾砂泥底である。主に内湾潮間帯下部の砂泥底で確認される。浜名湖では、干潮時の干潟にできたタイドプールの砂泥上を匍匐する姿が目撃された。

【現在の生息状況／減少の要因】

愛知県内では、生貝が発見されることがきわめて稀である。東幡豆町での生貝の確認状況は、大潮時に干出した干潟の砂泥底を篩にかけて発見された。当地は潮干狩り場となっている遠浅の干潟であり、周辺にはアマモ場も広がっている。全国的に減少傾向にあるものの、個体群の復活のきざしもあるとされる(早瀬・他, 2011)。本種の減少には、高度経済成長期の水質悪化や干潟環境の減少が起因していると推測される。

【保全上の留意点】

現在本種が生息確認される地域の環境を維持することが重要である。特にアマモ場などの他の貝類にとっても重要な生息環境を保全する事が重要である。

【特記事項】

近似種のアサグモキジビキガイは、本種と生息環境が異なり、より外海に開けた湾内の潮下帯砂質底に生息する別種である(石川, 2012)。これまでは、両種が混同され、すべてムラクモキジビキガイとされていた。愛知県内においても両種の存在に注意が必要である。

【引用文献】

- 福田 宏・木村昭一, 2012. ムラクモキジビキガイ, p.80. in: 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野市.
- 早瀬善正・種倉俊之・社家間太郎・松永育之・吉川 尚・松浦弘行・石川智士, 2011. 愛知県幡豆町の干潟および岩礁域潮間帯の貝類相, 東海大学海洋研究所研究報告, (32): 11-33.
- 石川 裕, 2012. ムラクモキジビキガイやオオシイノミガイと混同されていた貝, まいご, (19): 6-7.
- 中島徳男, 1996. 三河湾・遠州灘産海産貝類目録, 87 pp. 自刊.

【関連文献】

- 鈴木孝男・木村昭一・木村妙子・森 敬介・多留聖典, 2013. 干潟生物調査ガイドブック 全国版(南西諸島を除く), 269pp. 日本国際湿地保全連合, 東京.

(執筆者 早瀬善正)

ヤマキサゴ *Waldemaria japonica* (A. Adams)

【選定理由】

愛知県では駒山（豊田市）のみに生息する。県内の他の地域には分布しない希少種である。駒山での生息数は少なくはないが、生息地が限定的であり、当該地域の環境改変が行われた場合、直ちに県内での減少や絶滅に直結する種である。

【形態】

愛知県内の個体は、殻高 9.0～9.5mm、殻径 12.0～12.8mm 程度の小型種である。螺塔が低く、周縁は円く、殻質は比較的厚い。新鮮な個体では、繊細な成長肋が体層部に明瞭に認められる他、きわめて薄い殻皮が殻表を覆う。内唇の滑層は、殻底部に広く広がる。愛知県内には、赤色の殻の個体のみ見られる。蓋は石灰質で薄く、半月型である。軟体部は黒色で、細長い触角を有している。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県内では、現在、豊田市の駒山のみに生息が確認されている。

【世界および国内の分布】

本種は、日本固有種であり、国外には分布しない。日本国内においても、本州・四国・九州のみに分布する。各地域で形状や特徴が変異し、多くの形態型を有している。

【生息地の環境／生態的特性】

駒山山頂部のスギ植林の環境で確認される。周辺には広葉樹の自然林の環境が残存している。地上性種であり、林床の落葉堆積下などに生息するが、降雨時は、地表や低木の枝を活発に這い回る。県下では、駒山のみに生息し、生息範囲がきわめて限定的である。駒山では少なくはないが、多産するほど大きな個体群は見られない。

【現在の生息状況／減少の要因】

愛知県内では、駒山のみで確認される。明確な減少傾向が確認されていないが、分布域は、きわめて狭い地域のみであり、開発や森林伐採などがあれば直ちに個体群減少につながる。

【保全上の留意点】

現在、駒山のみに生息が知られる種であり、当地域において本種の保護および本種が生息する森林環境の保全が必要である。

【特記事項】

鳳来寺山自然科学博物館（新城市）に所蔵されている貝類標本（天野景従コレクション）中には、定光寺（瀬戸市）産の本種の標本が 1 個体存在している。天野コレクションには、採集日の記録がない他、1 つの標本ラベルに複数箇所の産地が記入されるなど、少なからず標本管理上の問題点がある。定光寺産のヤマキサゴ標本に関しても、後に他者が記入した新しいラベルのみが添えられ、自身の愛知県産陸貝報告（天野, 1966）にも定光寺の記録がない。過去に本種が定光寺に生息した可能性を完全に否定することはできないが、分布の疑わしさを伴う記録とみなした。

【引用文献】

天野景従, 1966. 愛知県の陸貝相, 69-82.+2pls. in: 東海高等学校教育文化研究所(編), 研究紀要 第4集, 東海高等学校教育文化研究所, 名古屋.

【関連文献】

川瀬基弘, 2012. 愛知県豊田市に生息する陸棲軟体動物, 豊田市史研究, (3): (57) 122 - (80) 99.

野々部良一・高桑 弘・原田一夫, 1984. 陸産貝類, pp.23-40. in: 佐藤正孝・安藤 尚(編), 愛知の動物, 325 pp. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.

矢橋 真, 1990. 東海地方の貝類現況報告(4), (17) 駒山 (愛知県東加茂郡旭町), かきつばた, (16): 13.

(執筆者 早瀬善正)

ナタネキバサナギガイ *Vertigo eogea* Pilsbry

【選定理由】

山麓や平地の湿地環境に生息する種である。この様な環境は、そのままでは人的に役立たない環境とみなされ、多くが土地造成や埋め立てなどにより消失した。愛知県内では、東部に古くから存在する湿地環境が現在でも一部地域に残存しており、僅かな環境に本種が生息している状況である。

【形態】

殻の色彩は茶褐色で、殻高 2mm 程の微小種である。殻口内には、多数の歯状突起を有している。本州の同科の類似種は、歯状突起が 4 本のみであり、それらと本種との識別は容易である。殻表は平滑で、殻口外唇中央部が内側に浅く湾入し、殻口が若干、ハート型を呈する。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊橋市 (野々部・他, 1984)、豊田市 (守谷, 2012)、設楽町 (早瀬, 未発表) などに分布が知られる。

【世界および国内の分布】

日本列島およびその周辺に分布する。日本国内では、北海道、本州、四国、九州 (?) に分布する。台湾に亜種 (*V. e. stagnalis* Kuroda, 1941) が知られるが、正確な種間関係については、今後の検討が必要であろう。

【生息地の環境／生態的特性】

ヨシ・ガマ類が生える水深の浅い湿地環境の水際に生息する。これらの湿地環境に隣接する水田の畦や休耕田の草地などで繁殖し、発見される場合もある。これまでに生態的な知見は全くないが、静岡市内の休耕田の環境では、春季に確認された本種の生貝が全て幼貝であった観察事例がある (早瀬, 未発表)。この事例より、本種は、冬季までに幼貝の加入があり、越冬し翌年成熟するものの、冬季には成貝が死滅するサイクルを繰り返す可能性が推測される。寿命が 1 年程度の種かもしれない。

【現在の生息状況／減少の要因】

本種は豊橋市、豊田市、設楽町などの湿地環境に生息する。名古屋市など都市部を中心に開発が進み、湿地環境が激減した。湿地環境の消滅と連動して本種の個体群も消滅の危機にある。

【保全上の留意点】

湿地環境があれば本種が必ず確認されるという訳ではなく、特定の湿地環境のみに生息する。しかし、本種の生息を決定付ける環境要因は明らかでない。したがって、本種が生息する湿地環境については、人為的な改変行為が行われることを防ぎ、維持する事が重要である。

【特記事項】

最近、愛知県内では、国内外来種のウスイロオカチグサが各地で確認されている。ウスイロオカチグサは、ナタネキバサナギガイより大型であり、生態的に同一の環境下に生息する。ウスイロオカチグサは、湿地の地表をグレーディングして有機物を摂食するが、特に微小な加入時のナタネキバサナギガイは、有機物と共に捕食される可能性が考えられる。実際に、ナタネキバサナギガイの多産した湿地において、ウスイロオカチグサの増加と共にナタネキバサナギガイが消滅した事例があり (早瀬, 2008)、ナタネキバサナギガイの生息地ではウスイロオカチグサの侵入を防ぐ必要がある。

【引用文献】

早瀬善正, 2008. 静岡市清水区能島遊水地におけるナガオカモノアラガイの生活史, 兵庫陸水生物, (60): 151-157.
守谷茂樹, 2012. 愛知県に分布するキバサナギガイ類 2 種の生息環境について, かきつばた, (37): 50-51.
野々部良一・高桑 弘・原田一夫, 1984. 陸産貝類, pp.23-40. in: 佐藤正孝・安藤 尚(編), 愛知の動物, 325 pp. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.

【関連文献】

上島 励, 2005. ナタネキバサナギガイ, p.189, in: 環境省自然環境局野生生物課(編), 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータブック - 6 陸・淡水産貝類, 402 pp. 財団法人 自然環境研究センター, 東京.

(執筆者 早瀬善正)

ナガナタネガイ *Columella edentula* (Draparnaud)

【選定理由】

北方系の陸産貝類であり、愛知県に分布する個体群は、生物地理学的にも貴重な存在である。愛知県内での生息範囲は限られており、希少な種である。県下の当該地域で開発行為などがなされた場合、本種個体群の存続が危ぶまれる。

【形態】

殻高 2mm 程の微小種である。殻色は、茶褐色。殻は砲弾型で殻表は滑らかな殻皮で覆われるが、不規則で粗い斜めの成長肋が現れる。キバサナギガイ類の幼貝の形状にも似るが、ナガナタネガイの方がより大型で螺管がより太く、実際に標本を用いた比較においては、識別が可能である。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県内では最近、分布が確認された。豊田市から岡崎市にかけての標高 350～550m 前後の山間部に分布が知られる（守谷, 2012）。

【世界および国内の分布】

ロシア～ヨーロッパ各国にかけて（Sysoev & Schileyko, 2009）の旧北区や新北区の北米（Burke, 2013）まで北半球に広く分布する種である。日本国内では北海道、本州、四国に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

愛知県下では、スギ・ヒノキ植林やコナラ（落葉広葉樹）の林に生息し、夏季には、低木や草本の葉裏で確認されている（守谷, 2012）。なお、葉裏に付着した状態で確認される個体は、成長途中のため、まだ螺塔の低い幼若個体であることが多い。

【現在の生息状況／減少の要因】

生息状況に関しては、上述の通りである。最近、愛知県での分布が知られたばかりの種であるため、減少傾向は判断できないが、動物地理区における全北区に分布する北方系種が遺存的に愛知県内に生息する点において、生物地理学的に重要な個体群である。生息数や生息地域も限定的であることから、今後、当地域での開発等が行われた場合は、本種への影響が懸念される。

【保全上の留意点】

目に付くことが殆どない微小種なので、分布地の環境の維持が重要である。愛知県内では、限られた地域の低山地に生息していることが明らかであるので、生息地の森林環境の保全措置を行うなどの環境への配慮が必要となる。この地域での開発行為等を行わないことが重要である。

【特記事項】

中部地方以南の分布地は特に少ない。本州南部の個体群は北方系要素の遺存的集団の可能性が高いとされる（上島, 2005）。なお、岡崎市のレッドデータブックでは情報不足種とされる（木村, 2014）。

【引用文献】

- Burke, T., 2013. Land snails and slugs of the Pacific Northwest, 344 pp. Oregon State University Press, Corvallis.
木村昭一, 2014. ナガナタネガイ, p.330, in: 岡崎市(編), 岡崎市の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックおかしき 2014, 362 pp. 岡崎市.
守谷茂樹, 2012. 愛知県に分布するキバサナギガイ類 2 種の生息環境について, かきつばた, (37): 50-51.
Sysoev, A., Schileyko, A., 2009. Land snails and slugs of Russia and adjacent countries, pp.312+142 color pls. Pensoft Publishers, Sofia-Moscow.
上島 励, 2005. 本州のナガナタネガイ, p.376, in: 環境省自然環境局野生生物課(編), 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータブック - 6 陸・淡水産貝類, 402 pp. 財団法人 自然環境研究センター, 東京.

【関連文献】

- 財団法人自然環境研究センター(編), 2010. 自然環境保全基礎調査 動物分布調査 日本の動物分布図集, 1070 pp. 環境省自然保護局 生物多様性センター, 富士吉田.

(執筆者 早瀬善正)

スナガイ *Gastrocopta armigerella* (Reinhardt)

【選定理由】

愛知県内では、海浜部のきわめて狭い範囲内で確認されている。生息地周辺の環境は、既に大部分が護岸や道路・住宅などの人工物に置き換わっており、僅かに残された場所のみに本種が生息している状況である。県下の生息地は、荒れ地環境となっており、いつ人的な改変行為が行われてもおかしくない状況であり、本種の絶滅の危険度は、きわめて高いと考えられる。

【形態】

殻高 2.0～2.5mm 程度の微小種である。殻は白色半透明で、円筒状の形態である。殻口内に 7 本程の歯状突起が見られる。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県内では、明確な分布地としては、田原市（松岡, 2010）、海部郡飛島村（早瀬・木村, 2011）、知多市（早瀬, 2013）の 3 地域が知られるのみである。

【世界および国内の分布】

日本国内のみに分布し、本州・四国・九州・先島諸島に至る沖縄までの広域に分布する。しかし、南西諸島を除き、生息地は限られており、本州における本種の確認地は、それほど多く知られていない。

【生息地の環境／生態的特性】

陸産貝類であるが、海岸の砂浜環境のみに生息する種である。海浜植物が生える砂浜と海岸林の林縁との境界部周辺にのみ生息する。

【現在の生息状況／減少の要因】

伊勢湾奥に面した生息地においては、いずれも開発により生息環境が狭められ、生息範囲は、数メートル四方程度に限定されている。愛知県内の本種の生息環境は、周囲の環境開発により砂浜環境というよりは、荒れ地環境と言える状態になっている。現状の生息地では、比較的多数の個体が確認でき、安定的な個体群が維持されているものの、当該生息地は僅かな面積であり、この場所の改変行為などが行われれば、容易に本種は絶滅してしまう。

【保全上の留意点】

生息地が限定されているので、環境を維持し、その場所の個体群を保護する必要がある。

【特記事項】

愛知県内では、石巻山（豊橋市）において、近似種のチョウセンスナガイが確認されている（永尾, 1997）。内陸でのスナガイの記録は、内陸部にも生息しているチョウセンスナガイの誤認記録と考えられる。愛知県に分布するチョウセンスナガイも、きわめて貴重な個体群ではあるが、発見時から明確な生貝の確認情報がなく、現状も情報が全くないため、対象種に扱っていない。しかし、県内で健全な個体群の生息が明らか場合は、チョウセンスナガイも評価対象種に扱う必要がある。

【引用文献】

- 早瀬善正, 2013. 愛知県におけるスナガイの新産地, かきつばた, (38): 53-55.
早瀬善正・木村昭一, 2011. 名古屋港周辺の陸産貝類相, 特に新たな外来移入種メリケンスナガイ(新称)について, ちりばたん, 41(2): 48-59.
松岡敬二, 2010. 第 3 章 愛知の生物 第 4 節 愛知の貝類, pp.246-276, in: 愛知県史編さん委員会(編), 愛知県史 別編 自然, 愛知県.
永尾和彦, 1997. (速報)チョウセンスナガイの新分布, かきつばた, (23): 22.

【関連文献】

- 財団法人自然環境研究センター(編), 2010. 自然環境保全基礎調査 動物分布調査 日本の動物分布図集, 1070 pp. 環境省自然保護局 生物多様性センター, 富士吉田.

(執筆者 早瀬善正)

ミニビロウドマイマイ *Nipponochloritis takedai* Minato

【選定理由】

愛知県では、東部のみに分布し、その生息地もきわめて限られる稀産種である。本種の生息個体数はきわめて少なく、近年の異常気象などに伴う急激な環境変化や開発など人為的な環境の改変行為が及ぼす影響も少なくないと考えられる。将来的に本種の個体群が持続的に維持されてゆくのか懸念される。

【形態】

最大個体において、殻高 7.9mm、殻径 13.3mm 程度の平巻き状の小型種である。殻はきわめて薄く、殻表には、殻皮毛が密生する。殻口は単純で肥厚や反転は見られない。十分に成長した個体においても、小型である。臍孔は狭いが深く明瞭に開くほか、螺塔が著しく低くほぼ扁平である。殻の特徴により、愛知県内に生息する同属の類似種であるビロウドマイマイと識別できる。ただし、幼貝の場合は、ビロウドマイマイでも臍孔が開いているので、形態的特徴による 2 種の区別は困難である。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県東部に散見される様であるが、正確な分布記録が殆どない。明確な産地としては、新城市 (旧・南設楽郡鳳来町) の鳳来寺山山頂部が知られている (早瀬・多田, 2005)。また、豊橋市細谷町の渥美外海に面した自然林内より死殻 1 個体のみが採集されている (1990 年 10 月 14 日 木村昭一採集)。

【世界および国内の分布】

日本国内の固有種であり、静岡県西部と愛知県東部の狭い分布範囲のみに生息する種である。

【生息地の環境／生態的特性】

鳳来寺山山頂部では、広葉樹林の林床の落葉下などに生息している。個体数がきわめて少ない種であり、発見自体が稀な種である。鳳来寺山では、山麓では、ビロウドマイマイのみが、山頂部には本種のみが生息しており、生態的に棲み分けているように思われる。

【現在の生息状況／減少の要因】

きわめて稀な種であるため、殆ど確認されていない。県下では、本種はあまりにも稀産のため分布記録が殆どなく、明確な減少傾向は把握できないが、近年の急激な気象変動や開発の影響により、本種の生息環境は狭められていると考える。

【保全上の留意点】

本種は生息地においても、多産しないので、本種の生息する森林環境を維持し、保全する必要がある。

【特記事項】

鳳来寺山の個体群は、記載時に本種とされなかったが (湊, 1984)、後に、ミニビロウドマイマイの地方型に過ぎないと結論付けられた (早瀬・多田, 2005)。なお、同定の際、臍孔がまだ閉じていないビロウドマイマイのきわめて幼若な個体が本種に誤認される可能性は高い。したがって、本種の同定は、必ず成貝個体に基づき検討する必要がある。

【引用文献】

早瀬善正・多田 昭, 2005. 愛知県産のビロウドマイマイ属について, かきつばた, (31): 8-19.
湊 宏, 1984. 静岡県の珍奇なミニビロウドマイマイ (新種), Venus, 43(3): 193-195.

【関連文献】

川瀬基弘, 2014. 新城市の軟体動物, pp.1-24. in: 鳳来寺山自然科学博物館(編), 新城市の自然誌 昆虫・動物編, 335 pp. 鳳来寺山自然科学博物館, 新城市.

(執筆者 早瀬善正)

ニッポンマメアゲマキ *Galeomma* sp.

【選定理由】

愛知県内では近年、三河湾と知多湾の各 1 箇所を確認されたのみである。知多湾の 1 箇所では比較的多くの個体を確認されたものの、愛知県下の他の多くの地域では全く確認がない。内湾域潮間帯の埋もれた転石下という特殊な生息環境のみに生息する希少な種である。最近、愛知県内における生息が知られたばかりの種であり、減少傾向は把握できないが、愛知県内では高度経済成長期に本種が生息できる良好な内湾環境や潮間帯の浅海域環境が埋め立てられ激減した。したがって、現状での本種の生息環境は愛知県内ではきわめて限られた場所のみである。

【形態】

殻長 10mm 程度の小型種である。殻の色彩には白と淡黄色の 2 型が見られる。生時は、殻を半開して転石の裏に足でしっかりと付着している。殻は白色半透明の外套膜で完全に覆われ、外套膜から 2 種類の形状の異なる短い突起が多数突出するので、一見、二枚貝には見えない形状である。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県内では、前島 (三河湾) (早瀬・他, 投稿中) と河和 (知多湾) (早瀬, 投稿準備中) のみで確認されている。潮間帯下部の転石下より確認されている。

【世界および国内の分布】

房総・男鹿半島～九州、朝鮮半島に分布。沖縄島や中国大陸にも近似した種が分布しているが、比較検討が進んでおらず、詳しい分布範囲は不明とされる (山下, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

内湾域の潮間帯に生息する。埋没転石裏に足でしっかりと付着している。周辺が還元層となる環境に生息する。本種の生態的特性として、周囲が還元環境でありながら、淡水が滲出しているために酸素や海水の循環があるきわめて特殊な微環境のみに生息している。

【現在の生息状況／減少の要因】

内湾域の潮間帯下部の埋没転石下に生息する。愛知県内ではごく一部の場所においては、比較的多くの個体の生息が確認されており、健全な個体群が維持されているものと推測する。しかし、このような場所はごく稀な例であり、愛知県内で本種が確認されること自体稀である。愛知県内では、本種が生息可能な良好な内湾環境や潮間帯の環境が高度経済成長期に激減した。

【保全上の留意点】

現状の生息地も小規模の改変行為で消滅するようなきわめて狭い区域であり、個体群の存続が危惧される。本種の健在生息地の改変行為を行わないことが重要である。

【特記事項】

本種をはじめ、転石下の特殊生息環境に棲む種が確認される場所には、他の希少な種も多種共存しており、きわめて多様性の高いホットスポットとなっている。単に特定の種を評価対象種に位置付けるのみではなく、これらの種の生息する環境と貝類相を合わせ「特殊環境棲貝類保護地」に指定するなど、今後は、環境を含む包括的な保護を考える必要がある。

【引用文献】

早瀬善正・大貫貴清・吉川 尚・松永育之・社家間太郎, 投稿中 (2014, 受理). 前島 (三河湾) の転石地潮間帯の貝類相 - 特徴的な 16 種の記録, ちりぼたん.
山下博由, 2012. ニッポンマメアゲマキ, p.159. in: 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285 pp. 東海大学出版会, 秦野市.

【関連文献】

兵庫県農政環境部環境創造局自然環境課(編), 2014. 兵庫の貴重な自然 兵庫県版レッドデータブック 2014 (貝類・その他無脊椎動物), 128 pp. 公益財団法人ひょうご環境創造協会, 神戸市.

(執筆者 早瀬善正)

ツヤマメアゲマキ *Scintilla nitidella* Habe

【選定理由】

愛知県内では近年、三河湾と知多湾の各 1 箇所を確認されたのみである。確認個体数は、いずれの地域においても少ない。内湾域潮間帯の埋もれた転石下という特殊な生息環境のみに生息する希少な種である。最近、愛知県内における生息が知られたばかりの種であり、減少傾向は把握できないが、県内では本種が生息する良好な内湾環境や潮間帯の環境が高度経済成長期に激減したため、本種の生息環境はきわめて限られていることが推測できる。

【形態】

殻長 6.6mm 程の小型種である。殻は白色半透明できわめて薄く、殻表は平滑で鈍い光沢がある。生時は、軟体 (外套) が殻を包み込み、先端部のみ黄橙色の長い突起が伸びる。本種の活動時は、腹足類 (巻貝類) のように足で匍匐するので、一見すると、ミノウミウシ類の様である。オウギウロコガイの軟体の特徴も似るが、突起先端の色彩が異なるほか、本種の突起の方が長く、数も多い。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県内では、前島 (三河湾) (早瀬・他, 投稿中) と河和 (知多湾) (早瀬, 投稿準備中) のみで確認されている。内湾潮間帯の転石下より確認されている。

【世界および国内の分布】

国内のみに分布が知られており、陸奥湾～九州に分布とされている (波部, 1977)。

【生息地の環境／生態的特性】

内湾環境に生息する。潮間帯の埋もれた転石下に付着して生息する。周辺が還元環境となっている場所に生息する。淡水が滲出する特殊な埋没転石下の微環境のみに生息する。オウギウロコガイとは同一の転石に並んで付着する場合もあり、同所分布する。

【現在の生息状況／減少の要因】

愛知県内では、限られた内湾環境の狭い範囲のみに生息している。特殊なマイクロハビタット (微生息環境) のみに生息する種と考えられる。したがって、内湾環境の開発が進んだ愛知県内においては、本種の生息環境は減少した可能性が高い。本種の生息には、きわめて多様性に富んだ内湾潮間帯の環境が保全・維持されてゆくことが必要である。

【保全上の留意点】

本種の生息環境を維持するためには、内湾環境自体の保全と維持が必要であるが、それと共に、潮間帯の転石環境や藻場、アマモ場環境など様々な相互関係を持つマイクロハビタット (微生息環境) をも保全・維持することがきわめて重要である。

【特記事項】

本種をはじめ、転石下の特殊生息環境に棲む種が確認される場所には、他の希少な種も多種共存しており、きわめて多様性の高いホットスポットとなっている。単に特定の種を評価対象種に位置付けるのみではなく、これらの種の生息する環境と貝類相を合わせ「特殊環境棲貝類保護地」に指定するなど、今後は、環境を含む包括的な保護を考える必要性がある。

【引用文献】

早瀬善正・大貫貴清・吉川 尚・松永育之・社家間太郎, 投稿中 (2014, 受理). 前島 (三河湾) の転石地潮間帯の貝類相 - 特徴的な 16 種の記録, ちりぼたん.
波部忠重, 1977. 日本産軟体動物分類学 二枚貝綱/堀足綱, 372 pp. 図鑑の北隆館, 東京.

【関連文献】

兵庫県農政環境部環境創造局自然環境課(編), 2014. 兵庫の貴重な自然 兵庫県版レッドデータブック 2014 (貝類・その他無脊椎動物), 128 pp. 公益財団法人ひょうご環境創造協会, 神戸市.

(執筆者 早瀬善正)

イボイボナメクジ *Granulilimax fuscicornis* Minato

【選定理由】

近年の温暖化傾向や開発等のための森林伐採に伴う林床の乾燥化など森林環境の悪化の影響を受けやすい種である。生息個体数は少なく、1日調査を行っても確認できない場合が多い。通常、10個体以上を確認しないきわめて希少な種である。愛知県内には複数種が存在すると思われるが、発見自体が稀なために、分類学的研究が遅れている。分類学上の重要性も高く、貴重な種群である。

【形態】

殻を持たないナメクジ状軟体動物であり、通常、ナメクジと認識されている柄眼類のナメクジ類とは分類学上の系統が異なる。生時の伸長時体長は、14.5～17.5mm程度であるが、個体差が大きい。背面の体表には顆粒状の微小突起が多数見られ、特に休止時には明瞭である。色彩は淡黄褐色で、明瞭な細い黒褐色の輪状の模様が背面周囲を囲む。背面の正中には、ぼやけた縦帯が見られる。

【分布の概要】

【県内の分布】

瀬戸市、新城市、豊橋市、田原市などで確認されている。内陸部の森林から海岸近くの林に至る広域の森林環境で確認される。愛知県内（石巻山）には、黒色の別種も存在する（河辺訓受氏 私信）。

【世界および国内の分布】

本科の種は、オーストラリア、東南アジア、中国にかけて分布するが、本種は日本固有種である。本州から琉球列島まで広く分布するとされているが、多数の未記載種が混同されており、正確には、本種は、本州、四国の固有種であろう。

【生息地の環境／生態的特性】

他の陸産貝類が多数生息する良好な森林環境に生息する。本種は陸産貝類のみを捕食する肉食性種である（早瀬, 2002）。5月末頃から産卵が確認され、卵径1.5mmの球状の卵を産出する。1個体が少数の卵を産出する。産卵後、3週間ほどで孵化し、孵化後の幼体も陸貝を捕食する（早瀬, 2008）。

【現在の生息状況／減少の要因】

自然林の環境やそれに隣接するスギ植林の環境など湿潤で良好な森林環境に生息する。生息個体数が少なく、現状としても多産地はない。本種は、陸産貝類の捕食者であり、陸産貝類の多数生息する森林環境ならば、標高や植生などの変化に影響されず生息するので、適応範囲の広い種であろうと思われる。しかし、近年の急激な気象変動に伴う乾燥化など森林環境の悪化や捕食対象となる他の陸産貝類の減少傾向が、本種の個体群存続を脅かしている可能性が強く考えられる。

【保全上の留意点】

稀産であり、再発見できない場合も多く、個体の保護よりも生息地域の森林環境の維持と保全に重点を置く必要がある。

【特記事項】

本種は、ナメクジ科の種として記載されたが、記載時の解剖図には口球を陰茎と誤認するなど誤りが多数見られ、ナメクジ科と考える根拠が間違いであった。本種の歯舌形状などはホソアシヒダナメクジ科に共通の特徴を示し、同科に位置付けられる。色彩の異なる別種も県内に存在するが、分類学的検討が遅れている状況では、この様な近縁種の方がむしろ稀産で重要な種の場合も多い。したがって、黒色の未記載種などに関しても、現時点で本種と同ランクの種として扱う必要がある。

【引用文献】

- 早瀬善正, 2002. ホソアシヒダナメクジ科2種の捕食行動, かきつばた, (28): 6-10.
早瀬善正, 2008. イボイボナメクジの卵と孵化の記録, かきつばた, (33): 47-48.

【関連文献】

- 湊 宏, 1989. 日本産ナメクジ科の新属新種, イボイボナメクジの記載, Venus, 48(4): 255-258.
Kurozumi, T., 1985. Evidens of slug predation on land snail eggs, Applied Entomology and Zoology, 20(4): 490-491.

（執筆者 早瀬善正）

ホソヤカギセル *Mundiphaedusa hosayaka* (Pilsbry)

【選定理由】

本種は愛知県東部を分布の中心とする中型のキセルガイで、ミカワギセルとよく似た分布パターンを示す。山地から平野部まで点々と分布するが、愛知県内での分布域はミカワギセルほど平野部には進出していない。良く保全された寺社林や自然林内の落葉、朽木の下に生息していることが多い。本種の生息地は現在も少なくはないが、上述のような生息環境の減少は多くの生息地で認められる。近年行われた岡崎市内での調査（木村，2014）では、旧岡崎市内での本種の分布状況の記録（山田，1991）と比較すると、かつての生息地で生息が確認できなかった例が少なくない。また豊橋市、三河山間地における産地、個体数とも減少傾向が認められる。

【形態】

殻高 18~28mm 程度、殻は非常に細長く、螺塔は高く、螺層数 7~10 層、左巻き（日本産本科の貝類は全て左巻き）。成長脈は弱く、殻表は平滑で光沢がある。主襞と 3~4 の腔襞がある。若い個体の殻は淡茶褐色で半透明で、光沢が強く、老成個体では殻皮は脱落し、灰白色になる。ほとんどの個体では老成しても殻頂部は欠損しない。産地によって殻の大きさには変異が認められる。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県内の分布域は比較的広く、北は長野県境付近の東三河山間部から岡崎市、西は旧豊田市、東及び南は豊橋市に分布する。

【世界および国内の分布】

本種は、日本固有種。静岡県西部、愛知県東部、三重県中部に分布し、タイプ産地は三重県鳥羽市である。近年長野県の一部地域にも分布することが報告された（飯田市美術博物館，2014）。ミカワギセルと同様、伊勢湾によって愛知県と三重県の分布が分断された様な分布パターンで、三重県側の分布域は志摩半島を中心とする。

【生息地の環境／生態的特性】

本種は谷沿いや池の周辺など湿潤な環境に生息するミカワギセルと比べるとやや乾燥した環境にも見られるが、良く保全された自然林や寺社林内にある古い照葉樹林、古い杉の植林内の湿度の高い朽ち木の下などに生息する。シイタケ栽培のホダ木の捨て場など、ある程度の湿度が保たれた林内の有機質が多い場所では個体数が多い。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在の生息状況については、【選定理由】の項参照。減少の要因としては、近年の夏季の高温化に伴う森林環境の乾燥化、開発による生息環境の消失などが考えられる。シイタケ栽培のホダ木の捨て場など里山的な環境の減少も一因としてあげられる。

【保全上の留意点】

上述した生息環境の保全が必要である。

【特記事項】

種小名の誤綴りの修正に伴いエンシュウギセルという和名が提唱され、環境省レッドリストには、その和名で掲載されている（財団法人自然環境研究センター，2010）。しかし、学名と標準和名と連動する必要性は無く、本書では、古くから広く流布しているホソヤカギセルで表記する。

【引用文献】

- 飯田市美術博物館，2014. 長野県産陸生・淡水生貝類 飯島國昭コレクション（飯田市美術博物館自然資料目録第2集），147pp. 飯田市美術博物館，飯田市。
- 木村昭一，2014. ホソヤカギセル，p.327, in: 岡崎市（編），岡崎市の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックおかげき 2014, 362pp. 岡崎市。
- 山田栄蔵，1991. 岡崎市内の陸産貝類について，かきつばた，(17): 5-7.
- 財団法人自然環境研究センター（編），2010. 自然環境保全基礎調査 動物分布調査 日本の動物分布図集，1070 pp. 環境省自然保護局 生物多様性センター，富士吉田。

【関連文献】

- 東 正雄，1982. 原色日本陸産貝類図鑑，343pp. 保育社，大阪。
- 野々部良一・高桑 弘・原田一夫，1984. 陸産貝類，pp.23-40. in: 佐藤正孝・安藤 尚（編），愛知の動物，325 pp. 愛知県郷土資料刊行会，名古屋。
- 湊 宏，1994. 日本産キセルガイ科貝類の分類と分布に関する研究，日本貝類学会。
- 増田 修・波部忠重，1989. 静岡県陸産淡水産貝類相，74pp. 東海大学自然史博物館。
- 松本幸雄，1979. 三重の貝類（三重県産貝類目録），179pp. 鳥羽水族館，鳥羽。

（執筆者 木村昭一）

カントウベッコウ *Bekkochlamys septentrionaslis* (Jacobi)

【選定理由】

愛知県東部の原生林などの良好な自然林の環境に生息する。本種が現在確認される環境においても、生息数はきわめて少なく、稀少な種である。開発などによる森林伐採などが行われた場合、乾燥化に伴い本種の個体群は容易に消滅する。常に軟体を露出させた状態の種であり、本種の生息には、きわめて湿潤で良好な自然林の環境が必要である。環境開発の進んだ愛知県内においては、生息環境が狭められ絶滅の危険性が高い種のひとつである。

【形態】

殻高 8~10mm、殻径 12~16mm 程度の小型種である。殻はきわめて薄く脆弱、淡黄褐色で殻表は平滑で光沢が強い。軟体は大きく、殻の中に退縮できない。1対の外套葉は広く大きく、殻の大部分を覆う。足は長く、後端に短い角状の尾角を供える。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県内では、稲武町や設楽町に分布する(木村・中根, 1996; 早瀬・他, 2012)。かつて定光寺(瀬戸市)にも分布した記録があるが(天野, 1966)、当地での最近の記録は全くなく、この地域の個体群は絶滅したと考えられる。現時点では、県東部の一部のみに分布する。

【世界および国内の分布】

日本国内のみに分布する種であり、関東地方から北陸地方、中部地方(三重県を除く)にかけて分布する。北陸地方の個体群をミドリベッコウとし、別種に扱う場合も多いが、亜種程度の分化であろうと思われる。

【生息地の環境／生態的特性】

良好な自然林の環境のみに生息する種である。倒木の下などでじっとして動かない個体が見つかるが(木村・中根, 1996)、降雨時は活発に這い回り、時には地表から 1m 程上の低木の枝を匍匐する個体も見られる。晩秋~冬季には生成貝が確認されないため、寿命が 1 年程度の短い種であろうと思われる。落葉や生の葉、藻類などの植物性のものを食べる種である(早瀬・他, 2012)。

【現在の生息状況／減少の要因】

原生林など限られた良好な自然林に生息するのみである。個体数の少ない種である上に原生林が少ない愛知県内においては、近年の温暖化傾向に伴う林床の乾燥化などの微環境の変化により本種の生息環境は狭められている。

【保全上の留意点】

1 世代の寿命が短いと考えられる種であり、開発等により生息地の環境が悪化すれば、次世代の個体発生が途絶え、その時点で直ちに個体群が消滅する可能性が高い種である。環境変化への対応能力が著しく弱いと考えられるので、本種の個体群を維持するためには、本種の生息環境を保全・維持することがきわめて重要である。

【特記事項】

愛知県内には、シコクベッコウやミドリベッコウの記録も見られるが(天野, 1966)、いずれも本種と同一種の記録と考えられる。

【引用文献】

- 天野景従, 1966. 愛知県の陸貝相, 69-82.+2pls. in: 東海高等学校教育文化研究所(編), 研究紀要 第4集, 東海高等学校教育文化研究所, 名古屋.
早瀬善正・木村昭一・川瀬基弘, 2012. 面ノ木原生林のベッコウマイマイ科3種, かきつばた, (37): 28-35.
木村昭一・中根吉夫, 1996. 第5章 軟体動物, pp.119-126. in: 稲武町史 - 自然 資料編, 稲武町教育委員会, 稲武町.

【関連文献】

- 野々部良一・高桑 弘・原田一夫, 1984. 陸産貝類, pp.23-40. in: 佐藤正孝・安藤 尚(編), 愛知の動物, 325 pp. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.

(執筆者 早瀬善正)

スカシベッコウ *Bekkochlamys serenus* (Pilsbry et Hirase in Hirase)

【選定理由】

愛知県では、東部の原生林など良好な自然林の環境のみで確認されている。開発や近年の急激な気象変化への対応能力の弱い種と考えられる。環境開発の進んだ愛知県内においては、生息環境が狭められ絶滅の危険性が高い種のひとつである。

【形態】

殻高 3.5mm、殻径 6.0mm 程度の小型種である。殻はきわめて薄く、殻表は平滑で光沢が強い。軟体は淡い黒色を帯び、活動時に大きく伸張するが、乾燥時は殻の中に退縮する。ウラジロベッコウに近似するため、死殻や幼貝でのこれら 2 種の区別はきわめて困難である。生成貝であれば、ウラジロベッコウに比べてスカシベッコウの巻きが少なく、螺塔が相対的に高い傾向にある特徴などにより識別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県内では、稲武町や設楽町に分布する (早瀬・他, 2012)。

【世界および国内の分布】

日本国内のみでの分布が知られ、日本の固有種と考えられる。本州のみに分布する。東北地方～甲信地方にかけて分布が集中しており、愛知県の分布地は、少なくとも、太平洋岸地域での西限分布地と考えられる。

【生息地の環境／生態的特性】

原生林などの良好な自然林の環境に生息し、個体数密度もきわめて低い種である。本種は 6 月頃に成熟個体が確認され、それ以外は幼貝のみ確認される状況より、寿命が 1 年程度の短い種であろうと思われる。落葉、菌類などを主に摂食する種と推測されている (早瀬・他, 2012)。東北地方では、サワグルミ林などにみられ、終日、太陽光のあたらないような林間の落葉下に棲むとされる (川口, 2002)。

【現在の生息状況／減少の要因】

原生林などの限られた良好な自然林のみに生息し、きわめて個体数の少ない種である。開発や近年の急激な気象変化の下での本種の健全な個体群の持続的な維持が可能なのか懸念される。本来、多産しない種であるものの、原生林が少ない愛知県内においては、近年の温暖化傾向に伴う林床の乾燥化などの微環境の変化により本種の生息環境は狭められていると思われる。

【保全上の留意点】

1 世代の寿命が短い種と考えられ、開発等により生息地の環境が悪化すれば、次世代の個体群が途絶える可能性が高い。本種の個体群を維持するためには、本種の生息環境の保全・維持がきわめて重要である。冬季に降雪量の多い寒冷な地域や比較的標高の高い地域に見られる種であるので、温暖化による気温の上昇傾向の影響も個体群減少の一因となる可能性がある。

【特記事項】

分類の難しい種であるので、専門家による種の同定が必要となる。

【引用文献】

早瀬善正・木村昭一・川瀬基弘, 2012. 面ノ木原生林のベッコウマイマイ科 3 種, かきつばた, (37): 28-35.
川口洋治, 2002. スカシベッコウ, p.202. in: 秋田県生活環境文化自然保護課(編), 秋田県の絶滅のおそれのある野生生物 2002 - 秋田県レッドデータブック - 動物編, 217 pp. 秋田県環境と文化のむら協会, 秋田県.

【関連文献】

財団法人自然環境研究センター(編), 2010. 自然環境保全基礎調査 動物分布調査 日本の動物分布図集, 1070 pp. 環境省自然保護局 生物多様性センター, 富士吉田.

(執筆者 早瀬善正)

タカキビ *Coneuplecta praealta* (Pilsbry)

【選定理由】

愛知県下では広く確認されるものの、生息数は少なく、発見自体も稀な種である。複数種が混在している可能性があり、分類学的にも重要な種である。本種は、主に山麓部や低山地の里山環境に生息するので、開発などによる生息環境および本種の減少が懸念される。

【形態】

殻高 4mm 程度の微小種である。螺層数がきわめて多く、高円錐状の特徴的な殻形態であり、他種との識別が比較的容易な種である。幼貝において、周縁の円いものと明瞭なキールを持つ 2 タイプがあり、種の検討が必要であるが、ここでは、同一種に扱っておく。

【分布の概要】

【県内の分布】

瀬戸市（早瀬, 2008）、豊田市（川瀬・他, 2011；2012）、新城市（川瀬, 2014）などの分布記録が見られる。

【世界および国内の分布】

国内のみに分布が知られ、本州（関東以西）、九州に広く分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

本種は、低木の葉裏に付着する個体が確認される場合が多く、特に幼貝ではその傾向が強い。薄暗く湿潤な森林環境下のアオキ類など常緑低木の葉裏で確認される。本種は 1 世代の寿命が 1 年程度の貝類と考えられる。

【現在の生息状況／減少の要因】

本種は、山麓部や低山地の里山環境に多く見られる種である。このような場所は、開発により消失し易い環境であることから、本種の生息環境も愛知県では減少傾向にあると考えられる。

【保全上の留意点】

本種の生息環境となる谷部などの薄暗く湿潤な森林環境の維持が必要である。

【特記事項】

特定の季節（春～夏季）のみ成貝になると考えられる上に、生成貝の発見はきわめて稀なので、愛知県内の個体に関しても分類学的研究が遅れている種群である。周縁の比較的円い小型個体はサドタカキビとされている（守谷, 2004）。愛知県には両種が生息すると考えられるが、現時点では分類学的に 2 種とするのが妥当かどうかとも不確定な要素が大きく、ここでは、とりあえず同一種として扱った。2 種が別種であることが明確となった場合は、両種共に絶滅危惧種となる。

【引用文献】

- 早瀬善正, 2008. 愛知県瀬戸市定光寺周辺における陸産貝類相調査, かきつばた, (33): 29-39.
川瀬基弘, 2014. 新城市の軟体動物, pp.1-24. in: 鳳来寺山自然科学博物館(編), 新城市の自然誌 昆虫・動物編, 335 pp. 鳳来寺山自然科学博物館, 新城市.
川瀬基弘・早瀬善正・市原 俊, 2011. 愛知県豊田市に生息する陸産貝類, 豊橋市自然史博物館研究報告, (21): 31-43.
川瀬基弘・村瀬文好・早瀬善正・市原 俊, 2012. 矢作川上中流域の河畔林に生息する陸産貝類, 矢作川研究, (16): 11-26.
守谷茂樹, 2004. 愛知県初記録の陸貝 2 種, かきつばた, (30): 21-22.

【関連文献】

上島 励, 1995. タカキビの分類学的位置, Venus, 54(2): 113-122.

(執筆者 早瀬善正)

スジキビ *Parakalliera ruida* (Pilsbry)

【選定理由】

本種は、主に原生林などの良好な自然林の森林環境に生息する。愛知県内では、本種の生息環境はきわめて限られた地域のみである上に、生息環境も開発などに伴い狭められているものと考えられる。

【形態】

殻高 2.6mm、殻径 3.5mm 程度の微小種である。殻は薄く、茶褐色である。周縁にはやや弱い明瞭なキールが見られる。螺塔部には、50 μ m 間隔で規則的に並ぶ鋭角な成長肋が明瞭である（守谷，2005）。殻底部には、周縁付近にも成長肋が認められるが、殻底～臍孔周辺では、弱い螺状脈のみとなる。軟体部は黒色である。生殖器官は、ベッコウマイマイ類のなかでも若干、特異な形状であり（早瀬・他，2012）、属位の検討が必要と思われる。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県内では、稲武町（面ノ木原生林）や設楽町の限られた地域のみ分布する（早瀬・他，2012）。

【世界および国内の分布】

日本国内の固有種と考えられる。本州に広く分布するが、生息地が限られる種であり、正式な記録がある地点数はそれほど多く見られない。

【生息地の環境／生態的特性】

良好な自然林の環境で確認される。主に沢沿いなどの湿潤な環境において、広葉樹の倒木朽木に付着する。本種は、主に菌類を摂食する可能性が推測されている（早瀬・他，2012）。東北から関東地方北部や日本海側地域に主分布域を持つので、寒冷地域を好む種であろうと思われる。したがって、中部地方以西の太平洋岸地域では、冬季に降雪量が多く、比較的標高の高い場所において、生息が確認されている。

【現在の生息状況／減少の要因】

愛知県下では、原生林などのきわめて良好な自然林の環境のみで生息確認されている。生息範囲が狭く、個体数密度も低い種であるので、環境開発などによる森林環境の変化は、本種の個体群維持に大きなダメージを与える。

【保全上の留意点】

本種は、僅かに流れる程度の沢水の枯渇や小規模ガレ場が消失する程度の微環境の変化でも生息が容易に脅かされるので、開発行為などによる環境への影響には、特に注意が必要である。薄暗い谷部などの湿潤な環境と生息基盤となる広葉樹林とその朽木の存在が本種の生息には重要である。

【特記事項】

国内の他の地域においても、朽木に付着した個体が見つかる場合が殆どであり、生態的にも本種が生育上何らかの目的のために朽木を活用していることが推測される。

【引用文献】

早瀬善正・木村昭一・川瀬基弘，2012. 面ノ木原生林のベッコウマイマイ科3種，かきつばた，(37): 28-35.
守谷茂樹，2005. 岐阜県で確認したスジキビとヒメマルマメタニシ，かきつばた，(31): 24-28.

【関連文献】

財団法人自然環境研究センター(編)，2010. 自然環境保全基礎調査 動物分布調査 日本の動物分布図集，1070 pp. 環境省自然保護局 生物多様性センター，富士吉田.

(執筆 早瀬善正)

ウメムラシタラガイ *Sitalina japonica* Habe

【選定理由】

稀産種である上に生息範囲も狭い種である。生息地は低山地や山麓などの里山的環境であり、この様な環境は、宅地化や開発により愛知県内では名古屋市などの都市部を中心に大きく失われている。したがって、愛知県内での本種の生息環境は都市部を中心として著しく狭められつつある。

【形態】

殻高 1.2mm、殻径 1.8mm 程度の低円錐状の微小種である。螺塔部から体層周縁部にかけて、螺肋上に 4 本ほどの明瞭な殻皮の隆起が見られる。

【分布の概要】

【県内の分布】

県内では、名古屋市（守谷, 2004a, b）、豊田市（川瀬・他, 2011；2012）、新城市（川瀬, 2014）などでの確認記録が見られる。

【世界および国内の分布】

韓国（巨文島）の記録も見られるが（肥後・後藤, 1993）、主に本州（関東地方以西）、四国、九州に分布し、南西諸島までの広い分布域を示す。

【生息地の環境／生態的特性】

主に低山地や山麓の環境に生息する種である。他県では島嶼の森林で確認される場合もある。林床の落葉下に生息する。微小である上に稀な種でもあり、生態に関しては何も知見がない。

【現在の生息状況／減少の要因】

愛知県では、開発の進んだ名古屋市内においても生息確認されており、比較的小規模であっても生息環境となる林が保全されていれば、本種の個体群も維持される。里山的環境に生息する種であるため、里山開発の進んだ愛知県内においては、本種の生息環境は、著しく狭められている。

【保全上の留意点】

本種の生息環境である低山地などにおいても、生息確認される場所は、きわめて狭い範囲内のみである。本種の生息が確認された環境やその周囲において、開発など改変行為を行わないことが重要である。

【特記事項】

主に藪とも言える人的には価値を認められることが殆どない里山の雑木林の環境に生息する種である。その上に微小種であることから、実際、本種の保護にあたっては、個体自体を保護することは、きわめて困難である。出来る限り本種の正確な分布地域を明確にし、その地域の環境自体を維持してゆく事が重要である。

【引用文献】

- 川瀬基弘, 2014. 新城市の軟体動物, pp.1-24. in: 鳳来寺山自然科学博物館(編), 新城市の自然誌 昆虫・動物編, 335 pp. 鳳来寺山自然科学博物館, 新城市.
- 川瀬基弘・早瀬善正・市原 俊, 2011. 愛知県豊田市に生息する陸産貝類, 豊橋市自然史博物館研究報告, (21): 31-43.
- 川瀬基弘・村瀬文好・早瀬善正・市原 俊, 2012. 矢作川上中流域の河畔林に生息する陸産貝類, 矢作川研究, (16): 11-26.
- 守谷茂樹, 2004a. 名古屋市内の陸貝の現況, かきつばた, (29): 25-31.
- 守谷茂樹, 2004b. 名古屋市の陸貝の現況 補足その1 (熱田神宮), かきつばた, (30): 23-26.
- 肥後俊一・後藤芳央, 1993. 日本および周辺地域産軟体動物総目録, 3+22+ 693+148 pp. エル貝類出版局, 八尾市.

【関連文献】

- 財団法人自然環境研究センター(編), 2010. 自然環境保全基礎調査 動物分布調査 日本の動物分布図集, 1070 pp. 環境省自然保護局 生物多様性センター, 富士吉田.

(執筆 早瀬善正)

ヒメカサキビ *Trochochlamys subcrenulata* (Pilsbry)

【選定理由】

海岸林や低山地などの里山的環境に生息する種であり、愛知県内においては、そのような環境は、宅地化や開発などにより減少している。そのため、本種も減少傾向にある可能性が考えられる。

【形態】

殻径 2.8mm 程度の微小種である。殻は、そろばん玉型で周縁には強いキールを有する。螺塔部には規則的かつ明瞭な成長肋が密に現れる。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県内には広く分布し、名古屋市（川瀬（監修），2013）、瀬戸市（早瀬，2008）、豊田市（川瀬・他，2011）、新城市（川瀬，2014）などでの分布が知られる。

【世界および国内の分布】

日本国内に広く分布し、主に本州、四国、九州に分布記録がある他、沖縄（久保，2014）にも分布記録が見られる。

【生息地の環境／生態的特性】

海岸林や低山地、山麓などの環境に生息する種である。スギ植林、広葉樹林などの林床の落葉堆積下に生息する。常緑樹林の若干、乾き気味の林床の落葉堆積下にも見られる。

【現在の生息状況／減少の要因】

里山的環境に主に生息する種であるので、現在の名古屋市内の一部地域からの生息記録も知られている。広く分布する種であるので、直ちに絶滅の危機に瀕する恐れはないものの、開発などに伴い、生息環境が著しく狭められている種と考えられる。

【保全上の留意点】

微小種であり、個体自体を保護することは、きわめて困難である。したがって、本種の保護には、生息地域の自然環境を保全し、維持する必要がある。

【特記事項】

サツマヒメカサキビは、本種の亜種として扱われる場合もあるが、殻形態も全く異なるので、別種と考える。特に西日本では、サツマヒメカサキビとされた本種の誤認記録も多いと思われる。

【引用文献】

- 早瀬善正，2008. 愛知県瀬戸市定光寺周辺における陸産貝類相調査，かきつばた，(33): 29-39.
川瀬基弘（監修），2013. なごや生きもの一斉調査 2012・陸貝編 - なごやで探そう！カタツムリ - 報告書，29 pp. なごや生物多様性保全活動協議会，名古屋.
川瀬基弘，2014. 新城市の軟体動物，pp.1-24. in: 鳳来寺山自然科学博物館（編），新城市の自然誌 昆虫・動物編，335 pp. 鳳来寺山自然科学博物館，新城市.
川瀬基弘・早瀬善正・市原 俊，2011. 愛知県豊田市に生息する陸産貝類，豊橋市自然史博物館研究報告，(21): 31-43.
久保弘文，2014. 恩納村の貝類，pp.245-340. in: 恩納村誌編さん委員会（編），恩納村誌 第1巻自然編，573 pp. 沖縄県恩納村役場，恩納村.

【関連文献】

- 財団法人自然環境研究センター（編），2010. 自然環境保全基礎調査 動物分布調査 日本の動物分布図集，1070 pp. 環境省自然保護局 生物多様性センター，富士吉田.

（執筆者 早瀬善正）

キセルガイモドキ *Mirus reinianus* (Kobelt)

【選定理由】

本種は本州から四国、九州に広く分布するためか、生息範囲に限られる種が多い陸産貝類においては、あまり注目されない種であり、環境省のレッドデータブックにも掲載されていない。しかし、古くから地域個体群も知られており、また形態や生態においても地域ごとに差異が認められ、分類学的な再検討が必要な種である。従って県単位のような地域ごとの個体群の保全もないがしるにはできない。本種は愛知県内では、山地を中心に分布するが、生息地は元々少なく(野々部ほか, 1984)、生息域も分断している。また生息地における個体数も概して非常に少なく、かつて多産地として著名であった豊橋市の石灰岩地である石巻山においても著しい減少傾向が確認されている。

【形態】

殻高 25~32mm 程度、殻は細長く、螺塔は高く、螺層数 7~9 層、外見が近似するキセルガイ科貝類とは異なり右巻き。成長脈は弱く、殻表は平滑で弱い光沢がある。外唇は肥厚し白色で光沢が強い。若い個体の殻は淡茶褐色で、老成個体では殻皮は脱落し、灰白色になる。県内でも産地によって殻の大きさには変異が認められる。石巻山産個体は概して大型になり殻質も厚く、殻口の肥厚もやや厚い。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県内の分布域は広いが生息地は少なく、古くから石巻山、嵩山、越戸、鳳来寺山、定光寺などが知られている(野々部ほか, 1984)。また東三河山間部(木村・中根, 1966)から豊橋市にかけて生息が確認されているが、生息地は少なく、生息面積も小さい。平野部での生息は確認されていない。

【世界および国内の分布】

本種は、日本固有種。本州、四国、九州に広く分布する。地域により貝殻形態や生態等に差異が認められる。

【生息地の環境／生態的特性】

本種は山地の自然林内の落ち葉や朽ち木、石灰岩地の石の下などに生息する。愛知県産の個体は石灰岩の壁などに付着する事はあるが、樹幹にはほとんど登らない。和歌山県南部、高知県の個体群は、愛知県産と比べると小型で、樹上に高く登ることも多い。卵生であることは知られているが、生活史等についてはほとんど知られていない。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在の生息状況については、【選定理由】の項参照。減少の要因としては、近年の夏季の高温化に伴う森林環境の乾燥化、開発による生息環境の消失などが考えられる。石巻山の個体群については伊勢湾台風以降他の陸産貝類と共に本種の減少傾向が指摘されているが(野々部ほか, 1984)、2000年代と比べても本種の近年の減少傾向が著しい。石巻山における近年の減少傾向についての原因は不明である。

【保全上の留意点】

上述した生息環境の保全が必要である。

【特記事項】

環境省のレッドデータブックには掲載されていないが、福岡県(2014)では絶滅危惧Ⅱ類、その他 10 以上の都道府県版レッドデータブックに掲載されている。

【引用文献】

- 福岡県, 2014. 福岡県の希少野生生物, 276pp.
木村昭一・中根吉夫, 1996. 第5章 軟体動物, pp.119-126. in: 稲武町史 - 自然 資料編, 稲武町教育委員会, 稲武町.
野々部良一・高桑 弘・原田一夫, 1984. 陸産貝類, pp.23-40. in: 佐藤正孝・安藤 尚(編), 愛知の動物, 325 pp. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.

【関連文献】

- 東 正雄, 1982. 原色日本陸産貝類図鑑, 343pp. 保育社, 大阪.
財団法人自然環境研究センター(編), 2010. 自然環境保全基礎調査 動物分布調査 日本の動物分布図集, 1070 pp. 環境省自然保護局 生物多様性センター, 富士吉田.

(執筆者 木村昭一)

ビロウドマイマイ *Nipponochloritis oscitans* (Martens)

【選定理由】

ビロウドマイマイ類は分類学的な検討が不十分で、種名が確定しなかった。近年、愛知県並びに中部地方に分布するビロウドマイマイ類の分類学的な検討が進み、同時に地理的分布の概要が明らかにされた (早瀬・多田, 2005; 早瀬・多田, 2008)。これらの知見を元に愛知県内の生息状況を再考し、岡崎市については、近年詳細に現地調査が行われた (木村, 2014)。その結果、愛知県内には本種は広く分布しているが、生息地は、自然度が高い寺社林や自然林に限定され、その生息地においても個体数は少ないことが明らかになった。また本種が生息できる環境は明らかに減少し、生息地、個体数とも減少していると評価された。

【形態】

殻はビロウドマイマイ類としては中型で殻高約 10mm 殻径約 20mm であるが、殻径 15mm 程度の小型の個体群、対照的に東三河山間部等では殻径 20mm を越えるような大型の個体群も確認されている。このような大型のタイプはエチゼンビロウドマイマイとして区別されていた経緯もある。螺塔は低く平らで、殻全体はやや丸みをおびる。個体群、または個体による変異はあるが、殻皮毛は比較的密生する。臍孔は十分に成長した個体では完全に閉じる。軟体部は黒褐色。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県内では東三河山間部から豊川市、豊橋市、岡崎市、蒲郡市、瀬戸市の丘陵地まで比較的広く分布する。近年名古屋市内でも生息が確認された (川瀬(監修), 2013)。

【世界および国内の分布】

本種は、日本固有種。富山県から愛知県の中部地方を中心に 7 県に分布することが報告されている (早瀬・多田, 2005; 早瀬・多田, 2008)。

【生息地の環境／生態的特性】

丘陵部から山地の湿度が保たれた、自然林もしくは寺社林内の朽ち木や瓦などが積み重なった下面に潜んでいることが多い。周囲の植生が改変され乾燥化が進行したり、朽木や瓦などの隠れ場所が整備され、取り払われると、生息できなくなる。陸産貝類は春から秋の降雨後、夜間には林床の表面にでて匍匐することが多いが、本種は表面に出てくることはほとんどない。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在の生息状況については、【選定理由】の項参照。減少の要因としては、近年の夏季の高温化に伴う森林環境の乾燥化、開発による生息環境の消失などが考えられる。シイタケ栽培のホダ木の捨て場など里山的な環境の減少も一因としてあげられる。前述したような生息環境が減少しているため、本種の減少の要因と考えられる。

【保全上の留意点】

自然林、寺社林を保全すること、林内の倒木や朽ち木等を取り払わない。多くの自然林、寺社林では、竹類の照葉樹林への浸食が著しく、適正な伐採を行って、森林を保全する必要がある。

【特記事項】

早瀬・多田 (2008) によると愛知県内にはビロウドマイマイ類として、ビロウドマイマイ (トウカイビロウドマイマイ)、ケハダビロウドマイマイ、ミニビロウドマイマイの 3 種が分布することが確認されている。過去の文献に散見されるヒメビロウドマイマイ、キヌビロウドマイマイの愛知県内からの生息記録は本種の誤同定とされた。

【引用文献】

- 早瀬善正・多田 昭, 2005. 愛知県産のビロウドマイマイ属について, かきつばた, (31): 8-19.
早瀬善正・多田 昭, 2008. 中部地方に分布するビロウドマイマイ属, かきつばた, (33): 17-211.
川瀬基弘 (監修), 2013. なごや生きもの一斉調査 2012・陸貝編 - なごやで探そう! カタツムリ - 報告書, 29 pp. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.
木村昭一, 2014. ビロウドマイマイ, p.325, in: 岡崎市(編), 岡崎市の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックおかげ 2014, 362 pp. 岡崎市.

【関連文献】

- 愛知県科学教育センター, 1967. 愛知の動物, 222pp.
天野景従, 1966. 愛知県の陸貝相, 69-82.+2pls. in: 東海高等学校教育文化研究所(編), 研究紀要 第4集, 東海高等学校教育文化研究所, 名古屋.
東 正雄, 1982. 原色日本陸産貝類図鑑, 343pp. 保育社, 大阪.
木村昭一・中根吉夫, 1996. 第5章 軟体動物, pp.119-126. in: 稲武町史 - 自然 資料編, 稲武町教育委員会, 稲武町.
増田 修・波部忠重, 1989. 静岡県陸産淡水産貝類相, 74pp. 東海大学自然史博物館.
野々部良一・高桑 弘・原田一夫, 1984. 陸産貝類, pp.23-40. in: 佐藤正孝・安藤 尚(編), 愛知の動物, 325 pp. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.
山田栄蔵, 1991. 岡崎市内の陸産貝類について, かきつばた, (17): 5-7.

(執筆 木村昭一)

カドコオオベソマイマイ *Aegista proba goniosoma* (Pilsbry et Hirase)

【選定理由】

愛知県では限られた地域に確認されるのみで、個体数も少なく、希少な種である。本亜種の西限分布地域の個体群としても重要である。

【形態】

殻高 7.4mm、殻径 14.1mm 程度の小型の種である。殻は、螺塔が低く、円盤状の形状である。周縁は強く角張るが、個体や地域により差異が認められる。鳳来寺山頂部の個体は特に周縁角が鋭く、愛知県内で最も本種の特徴を良く表している個体群である。ただし、豊田市などでは、周縁角が弱く、コオオベソマイマイとの区別が難しい個体も見られる。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県内では、豊田市 (川瀬, 2012) や新城市 (鳳来寺山) (矢野・早瀬, 2014) で確認されている。愛知県では東部に分布している。

【世界および国内の分布】

日本国内の固有種であり、主な分布域は、関東地方である。

【生息地の環境／生態的特性】

良好な広葉樹林やその付近に位置するスギ植林の林床部の落葉下に生息する。地上性種であり、一生を通して、落葉下のリター層や地表面で活動する。

【現在の生息状況／減少の要因】

豊田市 (駒山など) や新城市 (鳳来寺山) などに生息地が知られる。山地の森林林床部に生息している。愛知県内においては、本来、個体数の少ない希少種であるが、近年の夏季の高温化に伴う森林環境の乾燥化、開発による生息環境の減少などが懸念される。

【保全上の留意点】

生息個体数が少ない種であり、本種の保護には、個体の保護よりも生息環境の維持と保全が重要である。

【特記事項】

県内に生息するコオオベソマイマイと共にアラハダヒロベソマイマイの亜種として扱われるが、分子系統解析ではカドコオオベソマイマイはこれらの種との分化が示されており (Hirano et al., 2014)、実際は種レベルでの分化があると考えられる。愛知県内のカドコオオベソマイマイに関してどのような結果を示すのか現時点で不明だが、県内のコオオベソマイマイとカドコオオベソマイマイも明瞭に分化していることが示された場合は、今後、より貴重な個体群に扱う必要性が生じるだろう。

【引用文献】

- Hirano, T., Kameda, Y., Kimura, K., Chiba, S., 2014. Substantial incongruence among the morphology, taxonomy, and molecular phylogeny of the land snails *Aegista*, *Landouria*, *Trishoplita*, and *Pseudobuliminus* (Pulmonata: Bradybaenidae) occurring in East Asia, *Molecular Phylogenetics and Evolution*, 70: 171-181.
川瀬基弘, 2012. 愛知県豊田市に生息する陸棲軟体動物, 豊田市史研究, (3): (57) 122- (80) 99.
矢野重文・早瀬善正, 2014. 鳳来寺山のオオベソマイマイ属について, かきつばた, (39): 28-30.

【関連文献】

- 野々部良一・高桑 弘・原田一夫, 1984. 陸産貝類, 23-40. in: 佐藤正孝・安藤 尚(編), 愛知の動物, 325 pp. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.
財団法人自然環境研究センター(編), 2010. 自然環境保全基礎調査 動物分布調査 日本の動物分布図集, 1070 pp. 環境省自然保護局 生物多様性センター, 富士吉田.

(執筆者 早瀬善正)

ヒラマキガイモドキ *Polypylis hemisphaerula* (Benson)

【選定理由】

本種は主に平野部の水田環境に多数生息する種である。愛知県下の平野部の水田環境は、宅地造成などにより著しく減少している。このほか、稲作の農法の変化により、乾田化が進み生息環境が減少している。本種をはじめとする水田環境に依存する多くの淡水棲貝類は著しい減少傾向にある。

【形態】

殻径 4.5mm 程度の小型の左巻き種である。殻は平巻き状で茶褐色である。殻内には隔壁を有する。殻頂部は深く小さな窪みとなる。殻底部は弧状に膨らみ多数の巻きが確認できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県内では、刈谷市三田町 (早瀬, 2014.9.15 採集)、新城市 (川瀬, 2014)、豊橋市 (松岡, 2010) などで分布確認されている。主に平野部での広域の分布を示す。

【世界および国内の分布】

中国を模式産地とする。韓国、台湾などにも分布が知られる。日本国内においても平野部に広い分布傾向が見られる。

【生息地の環境／生態的特性】

多くの場合は、水田内やその周囲の小水路の泥の上や藻類上を這う個体が確認される。他の多くの淡水棲有肺類と同様に夏季に産卵を繰り返して個体数を急増させる傾向が見られる。冬季は個体数が減少し、殆ど水のない側溝や水溜りなどにおいて、落葉の溜まった堆積下の湿り気のある部分などで冬眠状態の個体を目にすることもある。

【現在の生息状況／減少の要因】

生息地においては、現在も多産する場合が多い。直ちに愛知県内から消滅するほどの危機的状況にある種ではないが、近年は、水田の消失あるいは水田環境が水棲生物にとっての悪化傾向にあることは明らかである。県内での本種の生息環境が減少しており、本種も都市部周辺より徐々に見られなくなっている。

【保全上の留意点】

水田や湿地環境が維持されていれば、繁殖力も強く、特に細かな事に留意する必要のない種である。水田環境の減少や乾田化農法が本種の減少の大きな一因となっている。

【特記事項】

南西諸島の個体群はリュウキュウヒラマキガイモドキ型として区別される場合もある。大陸を含めたこれら個体群と本州個体群との間に遺伝的分化などがある場合には、本州個体群の絶滅の危険度をより高く考える必要がある。

【引用文献】

- 川瀬基弘, 2014. 新城市の軟体動物, pp.1-24. in: 鳳来寺山自然科学博物館(編), 新城市の自然誌 昆虫・動物編, 335 pp. 鳳来寺山自然科学博物館, 新城市.
松岡敬二, 2010. 第3章 愛知の生物 第4節 愛知の貝類, pp.246-276, in: 愛知県史編さん委員会(編), 愛知県史 別編 自然, 愛知県.

【関連文献】

- 増田 修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑 ②汽水域を含む全国の淡水貝類, 240 pp. ピーシーズ, 東京.
財団法人自然環境研究センター(編), 2010. 自然環境保全基礎調査 動物分布調査 日本の動物分布図集, 1070 pp. 環境省自然保護局 生物多様性センター, 富士吉田.

(執筆者 早瀬善正)

モロハタマキビ (セトウチヘソカドタマキビ) *Lacuna carinifera* (A. Adams)

【選定理由】

個体群・個体数の減少、生息条件の悪化、特殊生息環境が選定理由としてあげられる。三河湾の個体群について、生息記録と共に形態特徴と生活史についての報告がある (早瀬ほか, 2013)。三河湾奥部 (蒲郡市沖) から湾口部 (南知多町沖) の干潟から潮下帯のアマモの葉上に付着して生息する。ほぼ 1 年生の種と考えられ、冬から早春に大型個体が見られる。県下のアマモ場の面積は明らかに減少しているため、本種の生息基盤も脆弱である。またアマモ場があれば必ず本種が生息しているわけではない。

【形態】

殻長 5 mm、季節により 10 mm 前後の大型個体も見られる。殻は菱形で、緑褐色で薄質半透明、殻表は平滑で弱い成長脈がある。殻長は尖り、殻周辺は角張り、臍孔は広く周辺には強い角がある。小型で臍孔の狭いセトウチヘソカドタマキビ *L. setonaikaiensis* は、瀬戸内海個体群で同種である (福田, 2012)。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県内の分布域は比較的広く、三河湾の沿岸域のほぼ全域に分布するが、生貝が確認されている場所は少なく、良好なアマモ場が残されている海域に限定される。

【世界および国内の分布】

日本を分布の中心とするが、朝鮮半島にも分布する。日本では北海道南部以南、瀬戸内海、九州北部までの内湾域のアマモ場に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

上述のとおり生息環境は良く保全されたアマモ場のアマモの葉上に限られる。ほぼ 1 年生の種と考えられ、冬から早春に大型個体が見られることが知られている (早瀬ほか, 2013)。そのためか個体数の年による変動も大きく、生息状況のモニタリングも注意を要する。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在の生息状況については、【選定理由】の項参照。減少の要因としては、県内におけるアマモ場の消失が最も重要である。ただし、アマモ場さえあれば本種が生息しているとは限らず、水質悪化など他の要因も考えられる。

【保全上の留意点】

現在本種が生息確認される海域の環境を維持することが重要である。特に本種の生息基盤としてのアマモ場を含めた、干潟から潮下帯に連続する生息環境を保全する事が重要である。

【引用文献】

- 福田 宏, 2012. モロハタマキビ (セトウチヘソカドタマキビ), p.34. in: 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285 pp. 東海大学出版会, 秦野市.
早瀬善正・種倉俊之・松永育之・長谷川貴大・山崎喬之・野場俊樹・神谷武之・吉川 尚, 2013. 三河湾に生息するモロハタマキビの形態的特徴と生活史 (学会発表講演要旨), *Venus*, 71(1-2): 150.

【関連文献】

- 木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類 (予報). *かきつばた*, (26): 18-20.
鈴木孝男・木村昭一・木村妙子・森 敬介・多留聖典, 2013. 干潟生物調査ガイドブック 全国版 (南西諸島を除く), 269pp. 日本国際湿地保全連合, 東京.

(執筆者 木村昭一)

カスミコダマ *Natica buriasensis* Récluz

【選定理由】

個体群・個体数の減少、生息条件の悪化が選定理由としてあげられる。現在県内の干潟で生貝が確認されている場所はない。三河湾・伊勢湾の湾口部では潮下帯より死殻が少数採集されている程度で生貝が採集されることはほとんど無い。内湾域の個体群の生息状況は危機的である。ただし、本種は渥美外海の潮下帯では継続的に生貝が確認されているので、直ちに絶滅する可能性は低いと判断された。

【形態】

殻長約 10 mm、ほぼ球形の巻貝で殻表は光沢が強い。殻表には茶褐色の幾何学模様から雲状の模様があるが成長段階や個体によって変異がある。外唇はクリーム色、殻軸、内唇は濃褐色。蓋は石灰質で白色、表面に弱い螺肋が多数ある。他の貝類の殻に孔を開けて食べる肉食性。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県内の内湾域での分布域は三河湾及び伊勢湾湾口部に限られ、生貝は極めて稀である。渥美外海の潮下帯の砂底からは継続的に生貝が確認されている。

【世界および国内の分布】

インド・太平洋に広く分布し、日本では相模湾から九州の内湾から湾口部に分布する。現在潮間帯で健全な個体群が確認されているのは九州西岸の狭い範囲に限られている (福田・木村, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

潮通しの良い砂底に生息し、本種が生息する海域は貝類の多様性も高い場合が多い。元々愛知県の干潟で生息が確認されていたかどうかは不明であるが、九州西岸では現在も干潟域で生息が確認されている。渥美外海の浅海域で操業する底引き網に入網したヒトデ類の胃中より生貝が採集されるが、生息海域は限られており、かつ個体数は少ない。生態的な特性についてはほとんど知られていない。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在の生息状況については、【選定理由】の項参照。内湾域での著しい減少の要因としては、本種が潮通しの良い、泥分の少ない砂底に生息することから、水質汚濁、底質環境の泥質化、有機物量の増加などが考えられる。

【保全上の留意点】

現在本種が生息確認される海域の環境を維持することが重要である。特に本種の生息基盤としての泥分の少ない砂底を含めた、干潟から潮下帯に連続する生息環境を保全する事が重要である。

【引用文献】

福田 宏・木村昭一, 2012. カスミコダマ, p.58. in: 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285 pp. 東海大学出版会, 秦野市.

【関連文献】

木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類 (予報). かきつばた, (26): 18-20.

(執筆者 木村昭一)

フロガイダマシ *Naticarius concinnus* (Dunker)

【選定理由】

個体群・個体数の減少、生息条件の悪化が選定理由としてあげられる。現在県内の干潟で生貝が確認されている場所はない。三河湾・伊勢湾の湾口部では潮下帯より死殻は比較的普通に採集されているが、生貝が採集されることは稀。内湾域の個体群の生息状況は深刻である。ただし、本種は渥美外海の潮下帯では継続的に生貝が確認されているので、直ちに絶滅する可能性は低いと判断された。

【形態】

殻長約 15 mm、ほぼ球形の巻貝で殻質は厚く、殻表は薄い殻皮で被われていて、光沢は無い。殻表には螺管に沿って濃茶褐色の雲状の模様帯が 2 本あり、その間の色彩は帯状に褐色になる。殻底部はクリーム色で、外唇、内唇もクリーム色。蓋は石灰質で厚く白色、表面に強い螺肋がある。他の貝類の殻に孔を開けて食べる肉食性。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県内の内湾域での分布域は三河湾及び伊勢湾湾口部に限られ、死殻は比較的普通に採集されるが、生貝は稀 (木村, 1995 ; 1996)。渥美外海の潮下帯の砂底からは継続的に生貝が確認されている。

【世界および国内の分布】

日本以外では朝鮮半島に分布する。日本では房総半島から九州の内湾から湾口部に分布する。瀬戸内海ではタマガイ科中最も減少傾向が著しい種として報告された (福田・木村, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

潮通しの良い砂底に生息し、本種が生息する海域は貝類の多様性も高い場合が多い。渥美外海の浅海域で操業する底引き網に入網したヒトデ類の胃中より生貝が採集されるが、生息海域は限られており、かつ個体数は少ない。生態的な特性についてはほとんど知られていない。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在の生息状況については、【選定理由】の項参照。内湾域での著しい減少の要因としては、本種が潮通しの良い、泥分の少ない砂底に生息することから、水質汚濁、底質環境の泥質化、有機物量の増加などが考えられる。

【保全上の留意点】

現在本種が生息確認される海域の環境を維持することが重要である。特に本種の生息基盤としての泥分の少ない砂底を含めた、干潟から潮下帯に連続する生息環境を保全する事が重要である。

【引用文献】

- 福田 宏・木村昭一, 2012. フロガイダマシ, p.59. in: 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285 pp. 東海大学出版会, 秦野市.
- 木村昭一, 1995. 日間賀島南部海岸の潮間帯付近の軟体動物相. 研究彙報(第 34 報): 16-27. 全国高等学校水産教育研究会.
- 木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第 35 報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.

【関連文献】

- 木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類 (予報). かきつばた, (26): 18-20.

(執筆者 木村昭一)

テングニシ *Pugilina (Hemifusus) tuba* (Gmelin)

【選定理由】

個体群・個体数の減少、生息条件の悪化が選定理由としてあげられる。現在県内の干潟で生貝が確認されている場所はない。三河湾・伊勢湾の湾口部では潮下帯より死殻は比較的普通に採集されているが、生貝が採集されることは少ない。内湾域の個体群の生息状況は深刻である。渥美外海の潮下帯では底引き網漁業により継続的に生貝が採集されているが、食用に大量に採集されていた時代と比べると個体数の減少は明らかである。

【形態】

殻長約 15cm で大型の個体は 20cm を越える。殻は紡錘形で殻口は大きくやや長い、殻表は茶褐色であるが、褐色の厚い殻皮で被われる。殻口は淡橙色で、水管はやや長く広い。蓋は革質で長い紡錘型。愛知県産の個体は、殻が大型の割には、殻質はやや薄く、螺管の肩部はやや角張り、小さな三角形の突起が多数並ぶ。有明海産及び和歌山県から鹿児島県にかけての外洋産の個体群は殻が非常に厚くなり肩部の突起の数は少ないが、大きく角状に発達し、いわゆる「オニニシ」と言われる貝殻形態になる。オニニシは本種と別種とされることもあるが、系統関係については検討を要す。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県内の内湾域での分布域は三河湾及び伊勢湾湾口部に限られ、死殻は比較的普通に採集されるが、生貝は少ない (木村, 1995 ; 1996)。渥美外海の潮下帯の砂底からは継続的に生貝が確認されている。

【世界および国内の分布】

日本以外では朝鮮半島、中国大陸、インド太平洋に分布する。日本では房総半島から九州の内湾から外洋にかけて分布する。瀬戸内海などの内湾域における干潟の個体群は著しく減少した (福田・木村, 2012)。日本海側では底引き網漁業によって現在でも食用として比較的普通に採集されている海域もある。

【生息地の環境／生態的特性】

内湾では外洋水の影響の強い礫混じりの砂泥底に生息している。外洋域では水深 20~50m の砂泥底に生息している。夏季に大型の卵嚢を他物に産み付ける。卵嚢は「うみほうずき」と呼ばれ、かつては玩具として販売されたが、現在流通することはほとんどない。肉食性である。生態的な特性についてはほとんど知られていない。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在の生息状況については、【選定理由】の項参照。内湾域での著しい減少の要因としては、船体塗料に含まれる有機スズによるインボセックスが減少要因の可能性はある (福田・木村, 2012)。外洋側での減少の原因は不明である。

【保全上の留意点】

現在本種が生息確認される海域の環境を維持することが重要である。内湾から外洋域、干潟から潮下帯に連続する生息環境を保全する事が重要である。

【引用文献】

- 福田 宏・木村昭一, 2012. テングニシ, p.72. in: 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285 pp. 東海大学出版会, 秦野市.
木村昭一, 1995. 日間賀島南部海岸の潮間帯付近の軟体動物相. 研究彙報(第 34 報): 16-27. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第 35 報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.

【関連文献】

- 堀口敏広, 1998. インボセックス 巻貝類における雌の雄化現象. 海洋と生物, (17): 283-288.
木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類 (予報). かきつばた, (26): 18-20.
鈴木孝男・木村昭一・木村妙子・森 敬介・多留聖典, 2013. 干潟生物調査ガイドブック 全国版 (南西諸島を除く), 269pp. 日本国際湿地保全連合, 東京.

(執筆者 木村昭一)

マクラガイ *Oliva mustelina* Lamarck

【選定理由】

個体群・個体数の減少、生息条件の悪化が選定理由としてあげられる。現在県内の干潟で生貝が確認されている場所はないが、一時的に底質環境が改善された干潟で生貝がごくわずかに採集された例がある (木村, 2005)。三河湾・伊勢湾の湾口部でも潮間帯はおろか潮下帯からも死殻すらほとんど採集されない。内湾域の個体群の生息状況は非常に深刻である。ただし、渥美外海の潮下帯では底引き網漁業により継続的に生貝が採集されていて、年による変動も大きい、比較的多数の個体が採集される場合もあるので、直ちに絶滅する種ではないと判断された。

【形態】

殻長約 35 mm、円筒形で殻表は強い光沢があり、平滑、殻質は非常に厚い。殻表は黄褐色の地色に濃褐色の不規則な波状の模様がある。螺塔は低く、体層は大きく、殻高のほとんどを占める。殻口は狭く、内唇は肥厚して白色。軟体部は大きく貝殻を被う。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県内では、一時的に蒲郡市の人工干潟で生息が確認された (木村, 2005) が、最近では内湾域全域の干潟から潮下帯を含めた海域で生貝の採集記録はない。渥美外海の潮下帯の砂底からは底引き網漁業によって生貝が確認されている。

【世界および国内の分布】

日本以外では朝鮮半島、中国大陸、インド太平洋に分布する。日本では房総半島から九州の内湾から外洋にかけて分布する。伊勢湾、瀬戸内海などの内湾域の干潟における本種の個体群は著しく減少した (木村, 2012)。渥美外海から土佐湾、新潟県以南の日本海の潮下帯では現在でも健全な個体群が確認されている。

【生息地の環境／生態的特性】

内湾では外洋水の影響の強い砂泥底に生息している。外洋域では水深 10～50m の砂泥底に生息している。生時に軟体部は殻をおおっているため、殻には付着物が無く、磨いたように平滑で光沢がある。肉食性で他の動物を丸呑みにする。生態的な特性についてはほとんど知られていない。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在の生息状況については、【選定理由】の項参照。内湾域での著しい減少の要因としては、マクラガイ科貝類は近年バイと近縁の種群であることが明らかにされていることから、船体塗料に含まれる有機スズによるインボセックスが減少要因の可能性はある。

【保全上の留意点】

現在本種が生息確認される海域の環境を維持することが重要である。内湾から外洋域、干潟から潮下帯に連続する生息環境を保全する事が重要である。

【引用文献】

- 木村昭一, 2012. マクラガイ, p.73. in: 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285 pp. 東海大学出版会, 秦野市.
木村昭一, 2005. 蒲郡市三谷町人工干潟の貝類相 続報. かきつばた, 31. 名古屋貝類談話会.

【関連文献】

- 堀口敏広, 1998. インボセックス 巻貝類における雌の雄化現象. 海洋と生物, (17): 283-288.
木村昭一, 1995. 日間賀島南部海岸の潮間帯付近の軟体動物相. 研究彙報(第 34 報): 16-27. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第 35 報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類 (予報). かきつばた, (26): 18-20.
木村昭一, 2004. 蒲郡市三谷町人工干潟の貝類相. かきつばた, 30. 名古屋貝類談話会.
鈴木孝男・木村昭一・木村妙子・森 敬介・多留聖典, 2013. 干潟生物調査ガイドブック 全国版 (南西諸島を除く), 269pp. 日本国際湿地保全連合, 東京.

(執筆者 木村昭一)

ヒガタヨコイトカケギリ *Cingulina cf. cingulata* (Dunker)

【選定理由】

個体群・個体数の減少、生息条件の悪化が選定理由としてあげられる。本種は形態の項目に記す特徴から外洋域に生息するヨコイトカケギリ *Cingulina cingulata* と区別され、和名が提唱された (福田, 2012)。愛知県ではヒガタヨコイトカケギリは、三河湾の内湾奥部の河口域に位置する泥質干潟に生息域があり、湾口部から渥美外海までで採集されるヨコイトカケギリとは生息域が分断され、形態的にも区別が可能である。ただし、三重県側の伊勢湾口部に位置する生浦湾では、生息域が連続的で両種の区別が難しい個体も現れるので、三河湾に生息する 2 種も同種である可能性があるが、内湾奥の個体群は干潟の減少、干潟環境の悪化で生息基盤が脆弱であるので、ヨコイトカケギリの最内湾奥の個体群としても準絶滅危惧種にランクされることは妥当であると判断された。

【形態】

殻長約 7 mm、細長い円錐形で、螺塔は著しく高い。殻は白色で殻質はやや厚く、螺層に強い 3 本の螺肋をめぐらす。以上の殻の特徴はヒガタヨコイトカケギリ、ヨコイトカケギリに共通であるが、ヒガタヨコイトカケギリは殻表の成長脈がやや粗く、光沢がない。また殻頂部は摩耗、欠損する個体が多い。ヨコイトカケギリの殻表は平滑で光沢があり、殻頂部も欠損することはほとんど無い。軟体部の形態では、ヨコイトカケギリは頭触角が細長く先端が尖るのに対してヒガタヨコイトカケギリはより太短く先端も鈍い (福田, 2012)。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県内では、汐川干潟、豊川河口域、矢作川河口域など内湾奥の河口域に位置する泥質干潟に、カワグチツボ、エドガワミズゴマツボ、ヌカルミクチキレと同所的に生息する。

【世界および国内の分布】

日本以外では現在まで分布記録はない。日本では陸奥湾から九州の内湾、河口、汽水域の泥底に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

内湾奥の泥質干潟の表面に生息している。本種の属するトウガタガイ科貝類には多毛類か貝類に取り付けて体液を吸う種が多いが、本種については不明。生態的な特性についてはほとんど知られていない。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在の生息状況については、【選定理由】の項参照。現在本種が生息確認される海域の環境を維持することが重要である。内湾から外洋域、干潟から潮下帯に連続する生息環境を保全する事が重要である。本種は内湾奥の河口域に生息するので干潟周辺の陸域の改変、干潟の埋め立て、無酸素水塊の発生、水質汚濁の影響を受けやすい。

【保全上の留意点】

現在本種が生息確認される海域の環境を維持することが重要である。干潟周辺の陸域を含めた干潟から潮下帯に連続する生息環境を保全する事が重要である。

【引用文献】

福田 宏, 2012. ヒガタヨコイトカケギリ, p.84. in: 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285 pp. 東海大学出版会, 秦野市.

【関連文献】

秀島佑典・木村妙子・木村昭一・佐藤達也, 2014. 生浦湾における貝類群集と底質環境の季節変動 (学会発表講演要旨). *Venus*, 72(1-4): 139.
木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第 35 報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
鈴木孝男・木村昭一・木村妙子・森 敬介・多留聖典, 2013. 干潟生物調査ガイドブック 全国版 (南西諸島を除く), 269pp. 日本国際湿地保全連合, 東京.

(執筆者 木村昭一)

ズベタイラギ *Atrina (Servatrina) japonica* (Reeve)

【選定理由】

元々愛知県版レッドデータブックにはタイラギとして以下に記す 2 種を合わせて準絶滅危惧種として掲載されていた(愛知県環境調査センター, 2009)。環境省第 4 次レッドリストでは、横川(1996)の研究結果に基づき、従来タイラギとされていた種には 2 種が含まれていることを採用し、ズベタイラギ *Atrina (Servatrina) japonica*、タイラギ(リシケタイラギ) *Atrina (Servatrina) lischkeana* の 2 種として掲載された。本書でもこれに従い 2 種として扱う。

個体群・個体数の減少、生息条件の悪化が選定理由としてあげられる。本県では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種は 1960 年代には三河湾奥部の渥美湾で海水浴客が誤って踏んで足をけがするほど多産した(愛知県科学教育センター, 1967)。しかし、近年三河湾奥部では死殻すら採集できない。三河湾湾口部、伊勢湾知多半島南部周辺では現在も漁業対象種となっているが、その量は年々減少している。

【形態】

殻長 30cm を越える大型種。長い三角形の殻で、黒褐色。殻はやや厚いが脆い。殻は長い三角形で、多数の低い肋が走るが、リシケタイラギのような鱗片はなく、殻表は平滑。従来“タイラギの無鱗型”と呼ばれていた種。三河湾湾口部ではリシケタイラギより本種の方が大型になり、漁業対象としては多く採集されている。貝殻中央部の貝柱は大きく美味で、高価に取り引きされる。

【分布の概要】

【県内の分布】

三河湾湾口部、伊勢湾知多半島南部周辺では現在も漁業対象種として採取されている。2008、2009 年のドレッジおよび潜水調査で名古屋港沖合の水深 2~15m の泥底から生貝が 1 個体、死殻が少数ではあるが採集された(木村, 2010)。

【世界および国内の分布】

日本以外では朝鮮半島、中国大陸に分布する。日本では本州から九州の内湾から湾口部にかけての低潮線から水深 30m の砂泥底に分布する。瀬戸内海以西ではリシケタイラギより生息地が少ない傾向がある(山下・木村, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

内湾の干潟から潮下帯の砂泥底に殻の後縁の部分を出した状態で大部分が埋もれて生息する。殻前部の足糸口からでる足糸を底質中の礫等に附着させかつ深く埋没しているので、掘り出すのは容易ではない。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在の生息状況については、【選定理由】の項参照。上述したように県内の潮下帯は環境が悪化しているため、本種の生息場所、生息数とも減少している。

【保全上の留意点】

現在本種が生息確認される海域の環境を維持することが重要である。内湾から外洋域、干潟から潮下帯に連続する生息環境を保全する事が重要である。また本種は重要な食用種なので、漁獲圧による資源量の減少も無視できない。詳細な資源量の調査に基づく適正な漁獲と資源管理が不可欠である。

【引用文献】

- 愛知県科学教育センター, 1967. 愛知の動物, 222pp.
愛知県環境調査センター(編), 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 2009 - 動物編 -, 651pp. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.
木村昭一, 2010. 貝類, pp.185-222. in: 名古屋市動植物実態調査検討会(監修), レッドデータブックなごや 2010 - 2004 年版補遺 -, 316pp. 名古屋市環境局環境都市推進部生物多様性企画室, 名古屋.
山下博由・木村昭一, 2012. ズベタイラギ, p.114. in: 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285 pp. 東海大学出版会, 秦野市.
横川浩治, 1996. タイラギ 2 型の遺伝的分化. *Venus*, 55: 25-39.

【関連文献】

- 木村昭一, 1995. 日間賀島南部海岸の潮間帯付近の軟体動物相. 研究彙報(第 34 報): 16-27. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第 35 報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18-20.
鈴木孝男・木村昭一・木村妙子・森 敬介・多留聖典, 2013. 干潟生物調査ガイドブック 全国版(南西諸島を除く), 269pp. 日本国際湿地保全連合, 東京.

(執筆者 木村昭一)

タイラギ (リシケタイラギ) *Atrina (Servatrina) lischkeana* (Clessi)

【選定理由】

元々愛知県版レッドデータブックにはタイラギとして以下に記す 2 種を合わせて準絶滅危惧種として掲載されていた(愛知県環境調査センター, 2009)。環境省第 4 次レッドリストでは、横川(1996)の研究結果に基づき、従来タイラギとされていた種には 2 種が含まれていることを採用し、ズベタイラギ *Atrina (Servatrina) japonic*、タイラギ (リシケタイラギ) *Atrina (Servatrina) lischkeana* の 2 種として掲載された。本書でもこれに従い 2 種として扱う。

個体群・個体数の減少、生息条件の悪化が選定理由としてあげられる。本県では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種は 1960 年代には三河湾奥部の渥美湾で海水浴客が誤って踏んで足をけがするほど多産した(愛知県科学教育センター, 1967)。しかし、近年三河湾奥部では死殻すら採集できない。三河湾湾口部、伊勢湾知多半島南部周辺では現在も漁業対象種となっているが、その量は年々減少している。

【形態】

殻長 25cm を越える大型種。長い三角形の殻で、茶褐色。殻はやや薄く脆い。殻は長い三角形で、多数の低い肋が走り、多数の強い鱗片がある。従来“タイラギの有鱗型”と呼ばれていた種で単にタイラギとも呼ばれる。三河湾湾口部ではズベタイラギの方が大型になり、漁業対象としては多く採集されている。貝殻中央部の貝柱は大きく美味で、高価に取り引きされる。

【分布の概要】

【県内の分布】

三河湾湾口部、伊勢湾知多半島南部周辺では現在も漁業対象種として採取されている。ズベタイラギより外洋側に分布が偏る。三河湾湾口部では個体数もズベタイラギの方が多い。渥美外海の浅海で操業する底引き網によって、本種の幼貝から若い個体の殻が大量に採集されることがあるが、生貝は少ない。

【世界および国内の分布】

日本以外での生息状況は不明。日本では本州から九州の内湾から湾口部にかけての低潮線から水深 30m の砂泥底に分布する。瀬戸内海以西ではズベタイラギより生息地が多い傾向がある(山下・木村, 2012)。有明海での漁獲では本種が圧倒的に多い。

【生息地の環境／生態的特性】

内湾の干潟から潮下帯の砂泥底に殻の後縁の部分を出した状態で大部分が埋もれて生息する。殻前部の足糸口からでる足糸を底質中の礫等に付着させかつ深く埋没しているため、掘り出すのは容易ではない。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在の生息状況については、【選定理由】の項参照。上述したように県内の潮下帯は環境が悪化しているため、本種の生息場所、生息数とも減少している。

【保全上の留意点】

現在本種が生息確認される海域の環境を維持することが重要である。内湾から外洋域、干潟から潮下帯に連続する生息環境を保全する事が重要である。また本種は重要な食用種なので、漁獲圧による資源量の減少も無視できない。詳細な資源量の調査に基づく適正な漁獲と資源管理が不可欠である。

【引用文献】

- 愛知県科学教育センター, 1967. 愛知の動物, 222pp.
愛知県環境調査センター(編), 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 2009 - 動物編 -, 651pp. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.
木村昭一, 2010. 貝類, pp.185-222. in: 名古屋市動植物実態調査検討会(監修), レッドデータブックなごや 2010 - 2004 年版補遺 -, 316pp. 名古屋市環境局環境都市推進部生物多様性企画室, 名古屋.
山下博由・木村昭一, 2012. リシケタイラギ, p.114. in: 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285 pp. 東海大学出版会, 秦野市.
横川浩治, 1996. タイラギ 2 型の遺伝的分化. *Venus*, 55: 25-39.

【関連文献】

- 木村昭一, 1995. 日間賀島南部海岸の潮間帯付近の軟体動物相. 研究彙報(第 34 報): 16-27. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第 35 報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18-20.
鈴木孝男・木村昭一・木村妙子・森 敬介・多留聖典, 2013. 干潟生物調査ガイドブック 全国版(南西諸島を除く), 269pp. 日本国際湿地保全連合, 東京.

(執筆者 木村昭一)

フジノハナガイ *Chion semigranosus* (Dunker)

【選定理由】

個体群・個体数の減少、生息条件の悪化が選定理由としてあげられる。外洋に生息するイメージが強いが、内湾域にも広く分布していた種 (木村, 2012)。1980年代後半に伊勢湾・三河湾の内湾域で個体数が激減し、全く生息が確認できなくなった場所も多い。現在、知多半島、渥美半島の伊勢湾沿岸などでは回復傾向が認められるが、従来の状態までには回復していない。三河湾では湾口部以外の沿岸では依然として回復傾向は認められない。

【形態】

殻長 20mm 程度に成長するが、現在では 15mm 前後の個体が多い。殻は亜三角形で、膨らみは弱い、殻質は厚い。殻表は光沢があり、白色、淡黄白色、淡褐色、薄紫色など個体変異が多い。殻の内側は濃い藤色に彩られる個体が多い。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県内の分布域は比較的広く、知多半島・渥美半島の伊勢湾沿岸、渥美半島の遠州灘沿岸域のほぼ全域に分布するが、生貝が確認されている場所は少ない。近年、知多半島南部内海海岸周辺では、冬季に海岸に生貝が多数打ち上がることが確認されている。

【世界および国内の分布】

日本以外では中国大陸、タイに分布する。日本では房総半島から九州までの内湾から外洋域の砂質底の潮間帯に生息する。三浦半島沿岸や玄界灘沿岸の外洋に開けた内湾域では安定した個体群が確認されている。

【生息地の環境／生態的特性】

内湾から外洋にかけての潮間帯上部の砂底に生息する。潮汐の周期に連動した垂直移動をする貝として有名である。内湾域では、潮通しが良く有機質や泥分が少ない砂質底を好むようである。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在の生息状況については、【選定理由】の項参照。減少の要因としては、内湾域の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していること等があげられる。本種の場合、特に底質の有機質、泥分の増加も減少の要因として考えられる。

【保全上の留意点】

現在本種が生息確認される海域の環境を維持することが重要である。特に本種の生息基盤としての有機質、泥分の少ない潮間帯の砂底の保全が重要であろう。

【引用文献】

木村昭一, 2012. フジノハナガイ, p.130. in: 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285 pp. 東海大学出版会, 秦野市.

【関連文献】

鈴木孝男・木村昭一・木村妙子・森 敬介・多留聖典, 2013. 干潟生物調査ガイドブック 全国版 (南西諸島を除く), 269pp. 日本国際湿地保全連合, 東京.

(執筆者 木村昭一)

【 情報不足種について 】

今回の見直しによって新たにレッドリストに掲載された情報不足の種について、簡易な解説を以下に記述した。

1. サドヤマトガイ *Japonia sadoensis* Pilsbry et Hirase

陸産貝類 盤足目 ヤマタニシ科 (国：準絶滅危惧)

近年分類学的な再検討が行われていて、今までの記録をそのまま採用できなくなってきた。記録のみで標本を実見できていないものについては実態不明。

2. ヒラベッコウガイ *Bekkochlamys micrograpta* (Pilsbry)

陸産貝類 マイマイ (柄眼) 目 ベッコウマイマイ科 (国：情報不足)

県内では生息地、生息数ともに少ないが、情報も少ない。

3. ヒゼンキビ *Parakaliella hizenensis* (Pilsbry)

陸産貝類 マイマイ (柄眼) 目 ベッコウマイマイ科 (国：準絶滅危惧)

生息地が少なく、希少だが、微小種で過去の生息情報も少ない。判断材料が少なく、情報不足とするのが適当と判断された。

4. ヒメハリマキビ *Parakaliella pagoduloides* (Gude)

陸産貝類 マイマイ (柄眼) 目 ベッコウマイマイ科 (国：準絶滅危惧)

個体数および生貝の確認例が少なく希少だが、微小種で過去の生息情報も少ない。判断材料が少なく、情報不足とするのが適当と判断された。

5. ハチジョウヒメベッコウ *Yamatochlamys circumdata* (Pilsbry)

陸産貝類 マイマイ (柄眼) 目 ベッコウマイマイ科 (国：準絶滅危惧)

県東部に僅かに生息するのみで希少。県内の正式な生息記録はない。判断材料が少なく、情報不足とするのが適当と判断された。

6. フトキセルガイモドキ *Mirus japonicus* (Moellendorff)

陸産貝類 マイマイ (柄眼) 目 キセルガイモドキ科 (国：リスト外)

近年の確認記録がなく絶滅の可能性が高いが、調査不十分。また、過去の記録も分類学的な検討が必要。

7. ヤマタカマイマイ *Satsuma papilliformis* (Kobelt)

陸産貝類 マイマイ (柄眼) 目 ナンバンマイマイ科 (国：準絶滅危惧)

近年の確認記録がなく絶滅の可能性が高いが、調査不十分。また、過去の記録も分類学的な検討が必要。

8. カタマメマイマイ *Lepidopisum conospira* (Pfeiffer)

陸産貝類 マイマイ (柄眼) 目 オナジマイマイ科 (国：絶滅危惧Ⅱ類)

生息地が少なく、希少。生息環境が特殊で、そのような生息環境の調査不足。また、一度生息が確認された場所から数年で姿を消す非常に特殊な生態の種でモニタリング自体が困難で、情報不足と判断された。

9. マメタニシ *Parafossarulus manchouricus japonicus* (Pilsbry)

淡水産貝類 盤足目 エゾマメタニシ科 (国：絶滅危惧Ⅱ類)

過去に豊橋市から生息記録がある。県内ではないが、近年移入と考えられる個体群も確認されており、現時点では判定が困難で情報不足と判断された。高いランクの絶滅危惧種である可能性もある。

10. ヒラマキミズマイマイ *Gyraulus spirillus* (Gould)

淡水産貝類 モノアラガイ (基眼) 目 ヒラマキガイ科 (国：情報不足)

県内の本種とされるものが正しく本種であるのか分類が未整理状態。生息環境の調査自体が不十分。従って調査不足と判定された。

11. ミズコハクガイ *Gyraulus soritai* Habe

淡水産貝類 モノアラガイ (基眼) 目 ヒラマキガイ科 (国：絶滅危惧Ⅱ類)

生息地が少なく、希少。生息環境が特殊で、本種の生息環境の調査自体が不十分。従って調査不足と判定された。

12. フネドブガイ *Anodonta arcaiformis* (Hude)

淡水産貝類 イシガイ目 イシガイ科 (国：リスト外)

2013年に愛知県より生息が記録されたが、人為的な攪乱が起こりやすいため池のみで発見されている。過去に大型種である本種を見逃していたとも考えにくく、移入個体群の可能性がかなり高い。ただし、自然分布である可能性も残っており、現時点では情報不足と判断された。

13. ヌノメチョウジガイ *Rissoina (Phosinella) pura* (Gould)

内湾産貝類 盤足目 リソツボ科 (国：準絶滅危惧)

死殻のみの確認、希少、生息環境が良くわからず、現時点では情報不足と判断された。高いランクの絶滅危惧種である可能性もある。

14. ヘソカドガイ *Paludinellassiminea japonica* (Pilsbry)

内湾産貝類 盤足目 カワザンショウガイ科 (国：リスト外)

近年の確認記録がなく、生息環境の調査は不十分。現時点では情報不足と判断された。高いランクの絶滅危惧種である可能性もある。

15. ナギツボ (未記載種) *Vitrinella* sp.

内湾産貝類 盤足目 イソコハクガイ科 (国：準絶滅危惧)

生息地が少なく、希少。未記載種で微小。現時点では情報不足と判断された。高いランクの

絶滅危惧種である可能性もある。

16. ウネナシイトカケ *Acrilla acuminata* (Sowerby II)

内湾産貝類 翼舌目 イトカケガイ科 (国：絶滅危惧Ⅱ類)

死殻は確認しているが現状不明。現時点では情報不足と判断された。高いランクの絶滅危惧種である可能性もある。

17. オニサザエ *Chicoreus asianus* Kuroda

内湾産貝類 新腹足目 アッキガイ科 (国：準絶滅危惧)

元々生息環境が少ない。元々本県では希少な種であった可能性もある。現時点では情報不足と判断された。高いランクの絶滅危惧種である可能性もある。

18. イワカワトクサ *Duplicaria evoluta* (Deshayes)

内湾産貝類 新腹足目 タケノコガイ科 (国：絶滅危惧Ⅱ類)

外洋潮下帯からは死殻が採集されているが、内湾域での生息状況は不明。現時点では情報不足と判断された。高いランクの絶滅危惧種である可能性もある。

19. イシン属の一種 *Tomura* sp.

内湾産貝類 異旋目 カクメイ科 (国：リスト外)

1個体のみ確認、希産。未記載種の可能性有り、微小種。分類学的な検討も必要で、現時点では情報不足と判断された。高いランクの絶滅危惧種である可能性もある。

20. カミスジカイコガイダマシ *Cylichnatys angustus* (Gould)

内湾産貝類 頭楯目 スイフガイ科 (国：絶滅危惧Ⅱ類)

生息は確認されているが、ランク付けするには近年の生息状況が十分でない。現時点では情報不足と判断された。

21. ヤミヨキセワタ *Melanochlamys* sp.

内湾産貝類 頭楯目 カノコキセワタ科 (国：情報不足)

分布状況は比較的把握されている種であるが、東京湾では移入個体群も知られており分類学的な再検討も要する。現時点では情報不足と判断された。やや高いランクの絶滅危惧種である可能性もある。

22. ヒメゴウナ *Monotygma eximia* (Lischke)

内湾産貝類 異旋目 トウガタガイ科 (国：準絶滅危惧)

死殻のみの確認、希少、本種の生息環境の調査不足。現時点では情報不足と判断された。高いランクの絶滅危惧種である可能性もある。

23. ハマシイノミガイ *Melampus nuxeastaneus* Kuroda

内湾産貝類 モノアラガイ (基眼) 目 オカミミガイ科 (国：リスト外)

生息地が少なく、希少。生息環境の調査不足。元々本県では希少な種であった可能性もある。現時点では情報不足と判断された。

24. モモノハナ *Moerella jodoensis* (Lischke)

内湾産貝類 ザルガイ目 ニッコウガイ科 (国：準絶滅危惧)

元々生息環境が少ない。元々本県では希少な種であった可能性もある。現時点では情報不足と判断された。高いランクの絶滅危惧種である可能性もある。

25. ナミノコ *Donax (Latona) cuneata* Linnaeus

内湾産貝類 ザルガイ目 フジノハナガイ科 (国：準絶滅危惧)

元々生息環境が少ない。元々本県では希少な種であった可能性もある。現時点では情報不足と判断された。高いランクの絶滅危惧種である可能性もある。

26. キヌタアゲマキ *Solecortus divaricatus* (Lischke)

内湾産貝類 ザルガイ目 キヌタアゲマキ科 (国：準絶滅危惧)

元々生息環境が少ない。元々本県では希少な種であった可能性もある。現時点では情報不足と判断された。高いランクの絶滅危惧種である可能性もある。

27. カモジガイ *Lutraria arcuata* Reeve

内湾産貝類 ザルガイ目 バカガイ科 (国：準絶滅危惧)

元々生息環境が少ない。また外洋の潮下帯の調査が不足している。元々本県では希少な種であった可能性もある。現時点では情報不足と判断された。高いランクの絶滅危惧種である可能性もある。

28. オオトリガイ *Lutraria maxima* Jonas

内湾産貝類 ザルガイ目 バカガイ科 (国：準絶滅危惧)

元々生息環境が少ない。また外洋の潮下帯の調査が不足している。元々本県では希少な種であった可能性もある。現時点では情報不足と判断された。高いランクの絶滅危惧種である可能性もある。

29. ウスハマグリ *Pitar kurodai* Matsubara

内湾産貝類 ザルガイ目 マルスダレガイ科 (国：絶滅危惧 I 類)

元々生息環境が少ない。また外洋の潮下帯の調査が不足している。元々本県では希少な種であった可能性もある。現時点では情報不足と判断された。高いランクの絶滅危惧種である可能性もある。

30. ガタヅキ (コハギガイ) *Arthritica reikoe* (Suzuki et Kosuge)

内湾産貝類 ザルガイ目 ウロコガイ科 (国：情報不足)

近年になって記載された種で情報不足。県内からの正式な生息記録はない。

31. マルヘノジガイ *Nipponomysella oblongata* (Yokoyama)

内湾産貝類 ザルガイ目 ウロコガイ科 (国：リスト外)

生息地が少なく、希少。本種の生息環境の調査不足。現時点では情報不足と判断された。

32. オキナノエガオ *Platomysia rugata* Habe

内湾産貝類 ザルガイ目 ウロコガイ科 (国：絶滅危惧Ⅰ類)

死殻資料あり(未発表データ)。現時点では情報不足と判断された。高いランクの絶滅危惧種である可能性もある。

【 国リストの新掲載種について 】

今回の見直しによって新たにレッドリストに掲載された「国リスト」の種について、対象種が愛知県では絶滅危惧種と判断されなかった理由を以下に記述した。

1. オオギセル *Megalophaedusa martensi* (Martens)

陸産貝類 マイマイ(柄眼)目 キセルガイ科 (国：準絶滅危惧)

県内では東三河山間部を中心に生息地点数、生息数が共に多く、絶滅危惧種とは判断されなかった。

2. エルベリギセル *Tyrannophaedusa aurantiaca moellendorffi* Nordsieck

陸産貝類 マイマイ(柄眼)目 キセルガイ科 (国：情報不足)

県内では丘陵地から山間部に生息地点数、生息数共に多く、絶滅危惧種とは判断されなかった。

3. オオウエキビ *Trochochlamys fraterna* (Pilsbry)

陸産貝類 マイマイ(柄眼)目 ベッコウマイマイ科 (国：情報不足)

県内では丘陵地から山間部に生息地点数、生息数共に多く、絶滅危惧種とは判断されなかった。

4. オオタニシ *Cipangopaludina japonica* (Martens)

淡水産貝類 盤足目 タニシ科 (国：準絶滅危惧)

県内では、丘陵地から山間部のため池に生息地点数、生息数共に多く、絶滅危惧種とは判断されなかった。今後のモニタリングは必要。

5. ヤマトシジミ *Corbicula japonica* Prime

淡水産貝類 マルスダレガイ目 シジミ科 (国：準絶滅危惧)

県内では河口の汽水域に、生息地点数、生息数共に多く、絶滅危惧種と判断されなかった。ただし、汽水域にも侵入している移入種のカネツケシジミとの競合の可能性もあり、モニタリングは必要な種。

6. ツボミ *Patelloida conulus* (Dunker)

内湾産貝類 カサガイ目 ユキノカサガイ科 (国：準絶滅危惧)
県内では内湾奥の干潟に生息地点数、生息数共に多く、絶滅危惧種と判断されなかった。

7. サキグロタマツメタ *Laguncula pulchella* Benson

内湾産貝類 盤足目 タマガイ科 (国：絶滅危惧Ⅰ類)
県内で確認される個体は移入個体。元々本県には分布しない種。

8. コケガラス *Modiolus metcalfei* (Hanley)

内湾産貝類 イガイ目 イガイ科 (国：準絶滅危惧)
県内で確認される個体は移入個体。本来本県には生息していなかった種と判断された。

9. ウネナシトマヤガイ *Trapezium liratum* (Reeve)

内湾産貝類 ザルガイ目 フナガタガイ科 (国：準絶滅危惧)
県内では生息数が多い。

10. クチバガイ *Coecella chinensis* (Gmelin)

内湾産貝類 ザルガイ目 チドリマスオ科 (国：準絶滅危惧)
県内では河口の汽水域、干潟の潮上帯付近に生息する。生息地点数、生息数共に多く、絶滅危惧種と判断されなかった。

11. オビクイ *Agriodesma navicula* (A.Adams et Reeve)

内湾産貝類 ネリガイ目 サザナミガイ科 (国：絶滅危惧Ⅱ類)
県内では内湾から外洋の潮下帯生息地点、生息数共に多い。